

# 英文学会誌

*English Department Journal* vol.49

第49号



宮城学院女子大学学芸学部英文学会  
Miyagi Gakuin Women's University  
2021年3月

表紙挿画：HERE WE GO ROUND THE MULBERRY BUSH  
作者：Walter Crane(1845-1915)  
制作年：1877  
サイズ：18.5cm×19cm  
© British Library

# 英 文 学 会 誌

第 49 号

2021 年 3 月

## 目次

A 'Special' Year: 2020	1
John Wiltshier	
論文	
Adrienne Kennedy の <i>The Ohio State Murders</i> における 殺人者	5
清水菜穂	
塩見允枝子 《空間的な詩》とリチャード・ハミルトン	23
吉村典子	
Attitudes on English Taboo Language at Miyagi Gakuin Women's University	47
Jennifer Green	
* * *	
新任教員挨拶	68
清水菜穂 藤崎さなえ 酒井祐輔	
英文学科生の活動	
ESL (English Speaking Lounge)	74
1年 築場ゆい 3年 秋山彩葉	
海外長期留学報告	76
リーズ大学 3年 安喰あゆみ	
リーズ大学 3年 佐藤有咲	
リーズ大学 3年 佐藤花歩	
北アリゾナ大学 3年 佐藤美歩	
DA (Department Assistant)	84
3年 青木若菜 4年 松田亜利紗	
2020 年度英文学科活動報告	
教員研究・教育活動報告	88
英文学科講義題目	100
英語英米文学専攻講義題目	103
卒業論文題目	104
英文学会活動報告	110
English Certification —私の勉強法—	114
編集後記	121



## A 'Special' Year: 2020

In the editorial note for this journal in 2019 Professor Suzuki\* wrote; "Tomorrow to fresh woods, and pastures new". When he wrote this he, nor any of us, could have imagined what exactly those 'fresh woods' and 'pastures new' would be like. 2020 has been a challenging year for everyone with the onset of the Corona virus pandemic. The start of the year was delayed until after Golden Week and then all classes were taught online. The summer study abroad in Canada was cancelled as was the 1st year educational visit to British Hills in December. However, the department adapted sensibly and quickly to teaching online and has been able to provide 50% face-to-face classes in the second semester. We introduced the use of Zoom and Microsoft Teams to allow us to teach online and will continue to use Teams as our learning management system in the future. This will benefit our department in the long term, so there are some positives to emerge from the abnormality.

The cover of this year's English Department Journal is a Walter Crane illustration of four young women dancing around a mulberry bush taken from a book of old nursery rhymes. The caption on the illustration reads; "*HERE WE GO ROUND THE MULBERRY BUSH*". The first two verses are as follows;

*Here we go round the mulberry bush,  
The mulberry bush, the mulberry bush;  
Here we go round the mulberry bush  
On a cold and frosty morning.*

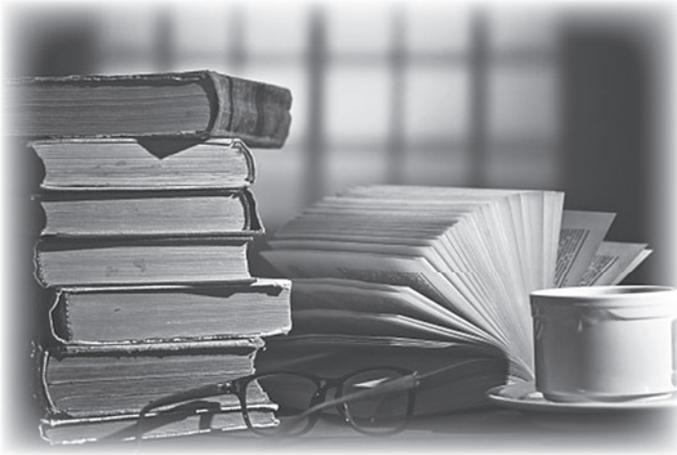
*This is the way we wash our hands,  
We wash our hands, we wash our hands;  
This is the way we wash our hands  
On a cold and frosty morning.*

This rhyme is sung by parents and teachers with young children in England to teach them about exercising, morning routines and personal hygiene. Perhaps an apt cover image for a year in which 'washing our hands' has become even more paramount.

John Wiltshier  
Head of department.

\*Masashi Suzuki retired last year after teaching English Literature in our department for ten years.

# 2020年度 論文





Adrienne Kennedy の *The Ohio State Murders* における殺人者

清水菜穂

## 1. はじめに

## (1) アフリカ系アメリカ演劇

20世紀後半のアメリカ演劇界におけるアフリカ系アメリカ人の活躍には目を見張るものがある。ピューリッツァー賞やトニー賞など数々の名だたる賞を受賞したオーガスト・ウィルソン (August Wilson, 1945–2005) をはじめとする作家たちや、二度にわたってトニー賞演劇部門最優秀俳優賞が授与されたジェイムズ・アール・ジョーンズ (James Earl Jones, 1931–) などの俳優たちは、ブロードウェイの舞台、映画、そしてテレビでもますます活躍するようになった。このことはアフリカ系アメリカ人女性劇作家についても例外ではない。ブロードウェイで成功した初のアフリカ系劇作家と言われるロレイン・ハンズベリ (Lorain Hansberry, 1930–65) は言うまでもなく、ピューリッツァー賞受賞者スーザン＝ロリ・パークス (Susan-Lori Parks, 1963–) にいたるまで、多くの女性劇作家たちがアメリカ演劇界で活躍してきている。

一方、日本では近年ハリウッド映画によってアフリカ系アメリカ人俳優が多数知られるところとなり、彼ら／彼女たちは広範な人気を得ている。しかし、アフリカ系アメリカ演劇はというと、その作品は一般にはほとんど知られていないと言ってよいだろう。「従来の黒人史でもなく白人劇作家が描く黒人演劇とも異なる、もう一つの黒人史また黒人演劇として、新しい黒人像を創造した」(有泉 7) ウィルソンの登場により、近年わが国でも文学研究の対象として注目されることが多くなってきたとはいえ、アフリカ系劇作家の作品が日本の舞台上で上演されることも、また翻訳が刊行

されることも非常に少ないのが実情である。

(2) エイドリエヌ・ケネディ (Adrienne Kennedy, 1931-) について

エイドリエンヌ・ケネディは、上で述べた現在活躍中のアフリカ系アメリカ人女性劇作家の一人である。<sup>1</sup>しかし、その作風は他に類を見ないほど非常に特徴あるものとなっている。彼女は「エウリピデスからシェークスピアまで、チャーホフからテネシー・ウィリアムズまで、すなわちギリシャ悲劇から不条理劇まで、すべての演劇の伝統の影響を受け」(Sollors, vii)つつ、シュールリアリスティックで表現主義的な技法を駆使した実験的な作品を生みだしている。黒人女性として自身が経験した事柄、たとえば家族との確執、大学での学生生活やそこで学んだ学問や知識、結婚や出産、人種差別などは、あくまでも登場人物の無意識や夢、不安や恐れを象徴するものとして用いられており、脈絡なく断片的に羅列される各場面から喚起されるのは殺人や暴力、心理的混乱や苦悩のイメージである。したがって、彼女の作品に読者／観客が魅了されるのは、ストーリーやプロットというよりも、登場人物の断片化された心象風景の詩的な表現であると言えるだろう。<sup>2</sup>

ケネディの代表的な作品には、アフリカ系アメリカ人として生まれたことを呪う女性の苦悩が、彼女の分身である歴史上の多様な人物(ビクトリア女王やイエス・キリストなど)によって語られる『ニグロの精神病院 (*Funnyhouse of a Negro*)』(1964)、作家志望のアフリカ系アメリカ人女性が、弟が事故で昏睡状態になったことをきっかけに夢想し始め、その中の様々な場面で女優に変身してハリウッドの俳優たちに自分の不幸を話す『映画

---

<sup>1</sup> メリーランド州ベセスダにある Round House Theatre とプリンストン大学の McCarter Theatre Center はケネディをたたえるフェスティバル "The Work of Adrienne Kennedy: Inspiration & Influence" を 2020 年 11 月 14 日から 2021 年 2 月 21 日までオンラインで配信している。OSM もそこで上映されている。

<sup>2</sup> 有泉は「ケネディの劇にはストーリーはない」(129) とまで言い切っている。

スターは白黒映画の主演 (*A Movie Star Has to Star in Black and White*, 1976)』などがある。どの作品も一幕劇であり、暴力、混乱、破壊などのイメージが時間順序に関係なく断片的かつ詩的に提示される。その結果、人種差別批判を打ちだす従来のステレオタイプとは全く異なるアフリカ系アメリカ人像を浮かびあがらせているのである。こうしたポストモダン的な内容は、主流の批評家やプロデューサーからは当初無視されたが、他方、マイノリティの作家や演劇人からの賞賛ももたらした。(Solomon, x)

### (3) 本稿の目的

1992年に初演された『オハイオ州殺人事件 (*The Ohio State Murders*)』(以下 *OSM*) は、ケネディの他の作品同様一幕ものであり、のちにスザンヌ・アレキサンダーという同一人物が登場する他の3作品とともに『アレキサンダー物語 (*The Alexander Plays*)』(2002)としてまとめられ刊行された。<sup>3</sup> その内容は、作者の分身と思われる成功した劇作家スザンヌ・アレキサンダーが、母校であるオハイオ州立大学の依頼により自らの作品における暴力的なイメージについて語る、というものである。先に述べたように、ストーリーやプロットという要素があまり明確でないことがケネディ作品の特徴であるが、*OSM* もまた、過去の出来事は時系列的に語られないため、読者／観客は出来事の順序を整理するのに困難が生じることも確かである。その一方で、初老と思われるスザンヌが双子の幼い子供をその父親に殺された事件について現在の時点から語るという点においてはある程度の一貫性があり、その意味で他の作品よりも比較的「わかりやすい」と言えるかもしれない。そして何よりもこの作品の最も重要な特徴は、作家スザンヌが自らの作品の暴力的なイメージを説明するのに、タイトル

<sup>3</sup> この作品のタイトルは初演された1992年、および *The Alexander Plays* においては“the”がついているが、*The Adrienne Kennedy Reader* では“the”がとれており、上記のフェスティバルでも“the”はない。

でもあるわが子の殺人事件を用いているにもかかわらず、事件それ自体についてはほんのわずかしき言及しない点である。代わりに学生時代に学んだ文学作品や友人と見た映画、そして大学のキャンパスとその周辺の風景などが語りの多くを占めている。しかしながら、これらの語られる内容や一見なにげない一つ一つの言葉すべては幾重にも絡み合せて、おぞましさや醜さ、孤独や不安、焦燥や苦悩、そして立ち向かうことが不可能なほどの閉塞状況や威圧感を重層的に浮かびあがらせている。その結果、殺人事件という暴力の異常性が真に迫ったものとして、読者／観客へ伝えられるのである。

ここでは、従来詳しく検討されてこなかった点、すなわち一見事件とは直接関係のない文学作品や風景描写などについての語りの分析を通して、ほとんど描かれることのない殺人現場の暴力性がいかにしてリアルなものとして想起されるのかについて考察する。そしてスザンヌの語りが生み出す重層的なイメージによって、「双子の殺人」という暴力の背後からさらに浮かびあがる「もう一つの殺し」の存在を提示したい。そこでは誰が、あるいは何が殺されたのか、そしてその殺人者とは誰、あるいは何なのか。これらを明らかにすることにより、OSMの重層性の理解をさらに深めてゆくことが本稿の最終的な目的である。

## 2. 喚起される暴力性

### (1) OSMの梗概

まず、OSMの梗概を簡単に紹介しておきたい。舞台はスザンヌの母校オハイオ州立大学の図書館の書庫。時は冬、窓の外では雪が降り続き、多くの書物が詰まった書棚の前に立つスザンヌは、すでに名を知られた作家である。彼女は大学からの依頼で、翌日自らの作品の特徴である暴力的なイメージについての講演をすることになっているため、今そのリハーサルをしていると語り始める。この初老にさしかかったと思われるスザンヌ(現

在)<sup>4</sup>が語るのは、1949年秋に大学に入学してから数年の間に遭遇した出来事である。彼女が今いる書庫は、当時授業が行われていた教室、教授の研究室、女子寮など様々な場面へと次から次へと変化し、そこでは若き日のスザンヌをもう一人の俳優が演じる。

文学を愛するスザンヌは大学の初年度に白人のロバート・ハンプシャー教授によるトマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』の講義を受けた。主人公のテスに感情移入するスザンヌの書いたレポートはハンプシャーに賞賛され、彼女はますます文学に魅せられ、同時に彼に対しても惹かれていった。しかし、他の教授には黒人<sup>5</sup>であるスザンヌの能力は全く認められることなく、英文学を専攻するという彼女の望みは叶えられなかった。1年後、彼女はハンプシャーと関係を持ち妊娠するが、彼は彼女を拒絶した。大学を追われたスザンヌは実の両親からも受け入れられず、ニューヨークの叔母の支援を受けて双子の女の子を出産し、大学のあるコロンバスに子供とともに戻って働き始めた。双子が生後3か月を迎えたとき、そのうちの一人が誘拐され、渓谷で遺体となって発見された。犯人が見つからないまま時がたったが、彼女と残されたもう一人の子供を理解し愛してくれるデイヴィッドという男性と結婚の約束までするにいった。しかし、大学図書館での仕事で家を空けている間に、隠し子の発覚を恐れたハンプシャーが双子のもう一人をナイフで殺害し、自らも命を絶ったのである。大学はこの事件の真相を明らかにせず、白人の教授が黒人居住地区で殺されたことにし、スザンヌの父親もまた政治家を通して「この悲劇を葬り去る」(OSM, 62)<sup>6</sup>よう、メディアに圧力をかけた。「亡くなった子供たちの

<sup>4</sup> 原作では現在の語り手を“SUZANNE (Present)」、若き日の語り手を“SUZANNE”と表記している。

<sup>5</sup> 1940～50年代には現在使われている“African-American”という呼称は用いられておらず、原作においても“negro”もしくは“black”となっている。したがって本稿では、この2語の訳語は「アフリカ系アメリカ人」ではなく「黒人」を使用することにする。

<sup>6</sup> 本稿におけるOSMからの引用はすべて*The Alexander Plays*からのものである。

ことを公の場で語るのは今日まで一度もなかった。さようなら、子供たちよ・・・」(62)とスザンヌ(現在)は語り、「これが私の作品の暴力的イメージのもとになっているのです」(63)と述べる。照明が書棚の無数の書物と雪が降っているのが見える窓を照らしながら、幕が下りる。

以上見てきたように、スザンヌ(現在)の過去は、若きスザンヌによって劇中劇として演じられる設定になっている。しかもハンプシャーによって朗読される一節はさらなる劇中劇の様相を呈した入れ子構造になっており、時間的配列を無視した断片的な場面の羅列とともに、この作品が非常に複雑な設定となっていることが理解される。

## (2) 言語表現によるイメージの喚起——『テス』、『アーサー王の死』、『戦艦ポチョムキン』

すでに述べたように、実際の文学作品や映画のパンフレットから引用される言葉は、すべて生々しい暴力性に満ちあふれたイメージを想起させるものばかりである。

たとえば、スザンヌはロバート・ハンプシャーが『ダーバヴィル家のテス』の講義の中で朗読する一節に感情移入する。主人公のテスはダーバヴィル家の当主アレックに犯されて産んだ子供を病気で亡くし、その後愛し合うエンジェルに過去を告げると、エンジェルはテスから去っていった。再びアレックにだまされて身をまかせたテスは、思い余ってアレックを殺す。ハンプシャーが朗読するのは、テスが殺人を犯したことを愛するエンジェルに打ち明ける次の場面である。

HANPSHIRE: (*Reads.*) . . .

'I have done it [killing Alec] —I don't know how,' she continued. 'Still, I owed it to you, and to myself Angel. I feared long ago, when I struck him on the mouth with my glove, that I might do it some day for the trap he set

for me in my simple youth, and his wrong to you through me. . . .’

...

‘What, bodily? Is he dead?’

‘Yes. He heard me crying about you, and he bitterly taunted me; and called you by a foul name; and then I did it. My heart could not bear it.’

(36–37)

テスが殺した相手は雇い主の息子で、彼女に「わな」をはめ、彼女を嘲り、彼女が真に愛する男性までをも罵倒する男だった。階級や貧富の差による性暴力が生みだす恐れや不安。「私の心は耐えられなかった」というテスの言葉は、この劇のタイトルでもある「殺人事件」が、「真の愛を成就するために引き起こされる殺人」というよりは、社会的格差による性暴力が事件の根底にあることをうかがわせる。同時にまた、子供を亡くしたテスに心を寄せるスザンヌの姿は、その後の彼女自身の子供の死の伏線にもなっている。

スザンヌ（現在）は1人目の子供を殺されたあと、ハンブシャーが行ったトマス・マロリーの『アーサー王の死』の講義を密かに聞いたときのことも思い出す。ハンブシャーが朗読するのは、アーサー王が甥のガウェインを死なせた悲しみを述べる場面である。ハンブシャーは、王の罪は唯一甥の死の悲しみによって表現されてはいるものの、それは「戦いのために引き起こされた罪」(48)だと述べる。ここでスザンヌ（現在）は、「ポビー（ハンブシャー）が私の身に何が起こったのか知っているかどうかかわからなかった。彼がしばしば私の後をつけていることなど知るよしもなかった」(49)と述べ、捨てられてもなおハンブシャーを慕う、幼くてうぶな当時の自分に気づいている。と同時に彼女は、身内の死も戦いのためには仕方なかったと言うアーサー王の中に、あたかも幼児殺しの正当性を主張しているかのようなハンブシャーの狡猾さと恐ろしさを見いだしているのだ

ろう。

続く『アーサー王の死』の講義は、暴力性の本質を想起させる重要な場面となっている。ハンプシャーはアーサー王の持つ剣エクスカリバーが王の死後に湖へと投げ込まれる場面を朗読する。剣は湖の底へと落ちる前に湖から現れる手によってとらえられる。彼はこの「湖の底 (abyss)」について次のように言及する。

HAMPSHIRE: The abyss in any form has a fascinating dual significance.

On one hand it is a symbol of depth in general; on the other a symbol of inferiority. The attraction of the abyss lies in the fact that these two aspects are inextricably linked together . . . . The abyss is usually identified with the land of the dead, the underworld, and is hence though not always associated with the Great Mother and earth god cults. (56)

人を殺すための「剣」、「深い底」、「劣っている存在」、「死者の国」、「闇の世界」という一連の言葉が「母性と切り離せない」と語られるとき、母親から生まれたばかりの幼児殺しという暴力の不気味で残虐なイメージが真に迫ってくる。『アーサー王の死』という英文学の代表的古典作品への傾倒は、スザンヌの文学に対する情熱を如実に表している。しかし上記引用の、「湖の底」から「闇」へ、そして「母性」へとつながる様は、大学でかきたてられた彼女の文学への情熱が母性の結果である子供の死へと続く運命を合わせもっていることをうかがわせているのである。

さらに幼児殺しの伏線はハンプシャーの講義だけではない。ルームメイトとともに図書館で見た映画『戦艦ポチョムキン』(1925)も同様である。モンタージュ理論を実践したこのセルゲイ・エイゼンシュタイン監督による世界的に知られた映画でもっとも有名な場面は、「オデッサの階段」と

して知られるオデッサ市民の虐殺を描いたところである。幼児を載せた乳母車が撃たれた母親の手から離れて階段を落ちていくシーンは、この映画を知る者ならば誰でも忘れることはできないものだろう。しかし、スザンヌ（現在）は映画の内容そのものではなく、映画のパンフレットに記された説明の文言に心を奪われたと、次のように述べている。

SUZANNE (Present): (*Reads paper.*) “The storming of the Winter Palace, the dismemberment of the Tsar’s Statue and a dead horse caught at the top of an opening drawbridge.” . . . I kept it in the top desk drawer in my room and would unfold it and read it over. (40)

ここでは、読者／観客は、たとえスザンヌが触れずにいても、「オデッサの階段」の乳母車の幼児を否応なく想起する。そのとき「皇帝の切断された像とはね橋の先にひっかかった死んだ馬」の残虐なシーンの表現は、幼児を載せて転がり落ちてゆく乳母車に何もできずにいる母親の張り裂けんばかりの苦悩と悲しみを増幅させる。想像を絶する暴力性が言葉による表現だけで目の前にありありと伝えられてくるのだ。

### (3) 視覚表現によるイメージの喚起——Oval 公園、女子寮の部屋

スザンヌ（現在）が頻繁に言及するものの中に、キャンパス内の建物や施設、周辺の通りの名前や地形がある。彼女はそうしたものの配置を頻繁に地図として描き、「[建物や通りの]配置や地形が私を不安にした」(27)と述べている。また主人公に自らを重ね合わせた『ダーバヴィル家のテス』に出てくる「風景を表現する言葉を私は愛した」(53)と述べているように、風景描写はスザンヌにとって非常に重要な意味を持っていることが理解される。たとえばスザンヌ（現在）の語りには、“Oval”と呼ばれる大学内の公園の名が頻繁に登場する。彼女が今語っている場である図書館も Oval

の一隅に位置している。情熱を傾けた文学や学問を象徴する図書館のある Oval はまた、ハンプシャーに妊娠を打ち明け拒絶された場所でもある。

SUZANNE (Present) . . .

I had been waiting for him as he came up the steps of University hall and onto the Oval. The immense circle of buildings was majestic amid dark trees and snow.

I told him I was pregnant.

. . .

SUZANNE: (*Hardly audible.*) I am pregnant.

SUZANNE (Present) : He stopped an instant.

HAMPSHIRE: (*On path.*) That's not possible. We were only together twice. You surely must have other relationships. It's not possible.

. . .

SUZANNE (Present) : He left me standing at the edge of the Oval. (42)

図書館のある Oval が象徴するのはスザンヌの文学への情熱であると同時に、卵の形を意味する Oval は妊娠や出産も連想させる。文学に対する情熱を唯一認めてくれた男性との間にできた子供は、言うなれば文学への情熱によって生みだされたものでもある。その子供の妊娠をこの Oval で拒絶されたことは、文学に対する情熱もまた拒絶されたように彼女は感じたことだろう。人種差別が当たり前のこととされていた 1950 年代のアメリカで、白人の大学教授ハンプシャーがスザンヌの妊娠を受け入れないのは当然のことだと言える。二人の間には単なる教師と学生の間にある境界線ではなく、黒白の人種を隔てる強固な社会的壁があったのだ。彼女が Oval を超えた先では何度も道に迷ってしまう (32, 34) のは、Oval を超えた先にはハンプシャーの研究室や白人の住む溪谷があり、その地域自体に

黒人の侵入を許さない見えない力が存在していたからだ。そしてスザンヌの子供の一人が最初に殺されたのもこの渓谷である。読者／観客の脳裏に、白人と黒人の間に生まれた言わば禁断の子供の遺体が渓谷の底 (abyss) に沈んでいる情景が否応なしに浮かんでくるのは言うまでもないだろう。

また女子寮の部屋の配置もスザンヌ（現在）にとっては思いださざるを得ないものである。彼女は自分の部屋の前の廊下の絵を描いた。その廊下に面する各部屋にはすべて白人女子学生が住んでおり、彼女たちはけっして黒人の学生と口を利かず、同じテーブルで食事をするのも拒絶し、パーティに黒人学生を招待することは一度もなかった。彼女が絵を描く様子は次のように語られる。

SUZANNE (Present): For many months I made drawings of the corridors in the dorm with the doors of each room outlined in red ink and muttered definitions of rooms, stains, color, skin.

I wrote long passages about my scalp and how it had bled and how I had examined my pores in a magnifying glass. And how the spots on the pillow cases had frightened me so that I had hidden my pillow cases even from Iris Ann [her roommate]. (61)

頭皮から流れる真っ赤な血の染みのついた枕カバーについて長い文章をつづりながら、赤インクで縁取られたけっして開かない白人の部屋のドアが描かれる。こうしたスザンヌの視覚的な表現により、彼女の孤独な感情や閉塞感が、毒々しい赤い色として読者／観客の脳裏にまざまざと浮かびあがってくる。

以上述べたように、OSMではスザンヌの眼に映るOvalや寮の情景、すなわち視覚的表現もまた彼女の心象風景となって、当時抱いていた情熱や希望、不安や恐怖、あるいは孤独感や閉塞感を巧みに伝えている。その結

果、幼児殺しの場面がほとんど語られなくとも、否、語られないがゆえに、その暴力性の不気味さがますます強調されるのである。

実はスザンヌによって語られないのは、殺人事件の状況だけではない。母親ならば出産や子育てについて、そして双子の成長の様子など詳しく触れてもおかしくないはずなのに、彼女は 1951 年 9 月にニューヨークで出産し、3 か月後にコロンバスに戻ったとしか言わない。それ以外は最初の事件が、車の中に一人で置いておいた子供がほんのわずかな時間になくなり、後に溪谷で溺死状態で発見されたこと (49)、そして二度目の事件は、ハンプシャーが調査員を装って家に押しかけ、家主の女性に子供の父親だと名乗り、世間に知られることを恐れて最初の子供を殺害したと告白した後、もう一人もその場で殺し、さらに自殺したということが淡淡と伝えられるだけである。(62) 子供に関する情報があまりにも少ないがゆえに、かえって直接かかわりのない数々の断片的な場面における複雑な言語表現と視覚表現の重層的なイメージが多大な効果をもって読者／観客の脳裏に焼きつくだと言えるだろう。

### 3. 双子の殺人事件ともう一つの「殺し」

#### (1) “C” が象徴するもの

双子それぞれの様子についての情報が非常に乏しい中で、唯一スザンヌが語り伝えるのは、二人の名前である。子供の名はキャシー (Cathi) とキャロル (Carol)。どちらも “C” で始まる。愛らしい二人の笑顔も、双子ならではの子育ての苦労も何も語られることのない一方で、ある意味記号でしかない名前のみが語られるのはなぜか。殺人の暴力性をイメージで伝えるこの作品で、“C” という記号は何を象徴しているのだろうか。このように考えてくると、双子の名前の背後からもう一つ別の「殺し」のイメージが浮かびあがってくるのだ。

二人の名前の頭文字がどちらも “C” であると知った時、読者／観客はお

そらくすぐに気づくはずである。“C”とは、ハンプシャー以外の授業でスザンヌが提出したすべてのレポートにつけられた評価でもあったことを。(45) そのレポートとはオスカー・ワイルドとジョージ・バーナード・ショーに関するもので、スザンヌは担当教授に面談して質問することさえ許されなかった。「英文科には黒人学生は一人もいず、黒人には英文科の科目を習得する能力などないと思われていた」(30-31) 時代である。19世紀イギリスの唯美主義文学の代表的作家ワイルドと、鋭い風刺を駆使したイギリス近代演劇の確立者であるショーについて黒人女子学生が書いたものなどは、初めから“C”以外の評価はありえないという、まさに高等教育の中に存在した人種差別観以外の何物でもない。

しかし、その“C”で始まる名を双子につけたスザンヌの想いを読者／観客は想像しなくてはならない。なぜなら双子は二人とも「殺された」からである。スザンヌ（現在）が語る彼女自身のその後の作品の暴力的イメージについて語るこの劇のタイトルがまさに衝撃的な「殺人事件」だからである。

先に述べたように、双子はスザンヌの文学に対する情熱の結果生まれたと言える。その情熱を全く理解することなく、白人社会に存在する黒人のステレオタイプによって与えられた評価“C”は、スザンヌの英文学専攻の夢を打ち砕いた。したがって“C”とはまさに彼女の情熱を殺したも同然なのである。このような意味を表す“C”で始まる名前を子供に与えたのは、スザンヌが自らの情熱にふたををする行為だと言えるだろう。つまり“C”をつけることで、スザンヌは文学への情熱を自ら断ったのである。彼女は文学へのひたむきな想いを自分で象徴的に「殺し」たのだ。

## (2) もう一つの「殺し」

しかし、スザンヌの殺しはこの段階では「未遂」である。なぜなら、そうした「殺し」を犯したあとでも彼女の情熱は死ななかつたからだ。つま

りニューヨークにとどまるように支援を申し出てくれた叔母の言葉にもかかわらず、スザンヌは出産直後に双子とともに大学のあるコロンバス (Columbus) に戻ったのである。大学の所在地の頭文字も“C”であるのも、スザンヌの文学への情熱が成就できない運命であることの伏線であろう。すでに大学を追われたにもかかわらず、ハンプシャーの講義を密かに聞き入るのも、まさに殺そうとしても殺すことのできない情熱の強さであり激しさを表している。「殺し」が貫徹したのは、キャロルが父親であるハンプシャーに殺害され、彼もまた自らの命を絶った次の場面である。

SUZANNE (Present): . . . When we returned at 10:05 the Ohio State murders had occurred.

Robert Hampshire (posing as a researcher) had killed Carol, our twin, and himself. It seems that once inside Mrs. Tyler's living room he told her he was the father of the twins, that he had never been able to forget their existence. They ruined his life. He said he knew that one day I would reveal this, that he would be investigated, there would be tests and his whole career would fail.

. . . Upstairs in the small sewing room where Carol and I slept Robert had killed Carol and himself (with a knife he had taken from the kitchen sink). (60–61)

ここで注目すべきは、二人目の子供が殺されハンプシャーが自殺した出来事が初めて「オハイオ州殺人事件」と述べられた点である。キャシーが殺された最初の事件は警察によって「溪谷殺人事件」(54) とは呼ばれたものの、スザンヌは単に「殺人事件」(54) としか呼んでいない。しかもここで語られる「オハイオ州殺人事件」は複数形である。幼い子供二人が殺されたのであるから複数形は当然だが、「10時5分に帰宅したときに起き

た」とわざわざ断るのは、キャロルだけでなく、この時自殺したハンブシャーもまた殺されたことを意味していると思われる。すなわち加害者のハンブシャーは、ここで被害者としても見なされていることが理解される。スザンヌの文学的才能を唯一理解し、その情熱とともに育んだハンブシャーは、隠し子の発覚を危惧し、やがて精神を病み自殺した。彼もまたその文学の情熱を自ら抹殺してしまった一人であり、彼の死もまた、白人と黒人の間に厳然と存在する壁による「殺人」だと言えるだろう。<sup>7</sup>

「オハイオ州殺人事件」とは、父親による双子の女の子の殺人である。しかし、殺人はそれだけではない。スザンヌは自ら子供の名前に「殺し」の象徴である頭文字をつけることで、文学への情熱を「殺し」た。彼女にこうした「殺し」を強制したのは、黒人には文学を学ぶ能力などないというステレオタイプの考え方が当然のごとくまかり通っていた社会の掟である。白人主流のアメリカ社会の規範である人種主義が、スザンヌとそしてハンブシャーの文学に対する激しい情熱を「殺し」たのである。したがってスザンヌ（現在）がその後生みだした作品は、文学に対する愛や情熱からではない。愛や情熱を失った＝殺された後に残された不安、恐怖、孤独、閉塞感といった負の内面が現れたものが作品化されているのだ。スザンヌの作品が暴力的なイメージにあふれているのは、幾重にも重なる「殺し」の残骸であるがゆえだと言えるだろう。

#### 4. おわりに——嬰兒殺しとギリシャ悲劇『メディア』

先にケネディはギリシャ悲劇の影響も受けていると述べたが、彼女にはエウリピデスのギリシャ悲劇「エレクトラ」と「オレステス」を縮約して翻訳した作品がある。このことからわかるように、ギリシャ悲劇とケネディの作品には大きな関連がある。これまで考察してきたように、OSM

<sup>7</sup> 小池美佐子はハンブシャーが被害者とされていることについて、植民地主義の観点から、スザンヌへの「愛の名の下」に抑圧者と被抑圧者の関係が入れ替わっていると述べている。(407)

を象徴的な意味での「母親による嬰兒殺し」ととらえるならば、エウリピデスのギリシャ悲劇『メディア』との関連も考える必要があるだろう。

エウリピデスの『メディア』の内容は次のとおりである。コルキスの王女メディアは、権力と財産に惹かれて別の女性と結婚しようとする夫イアソンに対する復讐のため、相手の女性を殺害し、苦悩と逡巡の果てに、自身の幼い息子二人を手にかける。すべてを失って嘆き悲しむイアソンをあとに、メディアは息子たちの死体を抱いて去っていく。復讐に燃えて子供まで殺害したメディアは、これまで「悪女」あるいは「毒婦」として一般にはとらえられてきた。また、殺害時に家の中から聞こえてくる子供たちの「ほんとうに、お願い、助けてよう、今のうちに」「ああ、剣の網が、迫ってくる」(136) という叫び声やギリシャ悲劇特有のコロスの声が、不気味さや恐ろしさといった子殺しの暴力性と悲劇性を物語るのに非常に大きな効果をあげている。

OSM と『メディア』では、自分のキャリアの破滅を恐れた父親による幼児殺害と、自分を捨てた男への復讐のためにその男との間にできた子供を殺した母親、という大きな相違がある。また加害者である父親ハンプシャーは最終的に自殺するのに対し、母親メディアは男のもとを立ち去るという設定も大いに異なる。したがって両作品の直接的な関連については、従来注目されてはこなかった。しかし、これまで分析してきた象徴的な暴力性に満ちた OSM は、『メディア』を想起することによって、この有名な悲劇作品を複雑に反転させた作品として新たな姿を現してくるのではないだろうか。

女性の身体を所有し妊娠させながら、自らの将来に害となるとわかるや否や捨ててしまう点は、ハンプシャーもイアソンも同じである。子供の死を嘆き悲しむイアソンだが、メディアに子殺しをさせた原因は彼自身の不貞である。一方、スザンヌの文学への愛と情熱をはぐくんだハンプシャーも、結局は二人の愛と情熱の賜物である双子を殺してしまう。すべてを失っ

て泣き崩れるイアソンにも、気が狂って自殺してしまうハンプシャーにも、同じく希望はない。しかも「毒婦」とされるメディアが子殺しを行ったのは、けっしてイアソンへの復讐のためだけではなくたのではないか、メディアもまたスザンヌと同様、愛や情熱をあえて自ら「殺した」のではないかと思わせる言葉がある。「あの子たち、どのみち、命はないのです。そうというなら、生みの母の手にかかるのが、せめてもの合わせと言えましょう」(134) という彼女の言葉には、自らの分身ともいえるものの運命は心無い他者によって決定されるより、あふれる愛を抱く自分によって抹殺されるほうがより意味があるのではないかという、哀しく切ない心情が見いだせる。これは文学への情熱を自ら捨て去るかのようになり、「C」の頭文字をもつ名をわが子たちにつけたスザンヌの心情そのものではないだろうか。こうして OSM の読者／観客には、メディアの子供たちの断末魔の声がキャシーとキャロルの泣き声となって聞こえてくるのである。

アメリカ演劇の研究者ケヴィン・J・ウェットモア (Kevin J. Wetmore, Jr.) は、1856 年に起こった奴隷主の農園から子供とともに逃亡したところを追手に発見され、わが子を殺したマーガレット・ガーナー (Margaret Garner) の事件<sup>8</sup> をとりあげ、この事件が黒人女性に本来的に備わっている精神的病を強調するかのような絵画作品 *Black Media* (1876) となった経緯について考察している。(132) 彼は、わが子を殺した女性が長年「悪女」や「毒婦」としてみなされてきたのは、まさに『メディア』に由来すると言う。(136) ケネディの OSM はそうした『メディア』に始まる「悪女」による子殺しの系譜を換骨奪胎し、白人男性社会アメリカの中で、文学への愛と情熱という「わが子」を殺してしまう黒人女性の姿を、あふれる暴力的なイメージを駆使することで象徴的に描きだしたのだと言えるだろう。

---

<sup>8</sup> この事件は、トニ・モリソン (Toni Morrison) の長編 *Beloved* (1987) 創作の契機となったことで一般に知られるようになった。

参考文献

- Davis, Thadious M. and Trudier Harris, eds. *Afro-American Writers After 1955: Dramatists and Prose Writers, Dictionary of Literary Biography*, vol.38. Brucoli Clark, 1985.
- Hill, Errol G. and James V. Hatch. *A History of African American Theatre*. Cambridge UP. 2003.
- Kennedy, Adrienne. *The Adrienne Kennedy Reader*. University of Minnesota Press, 2001.
- . *The Alexander Plays*. University of Minnesota Press, 1992.
- . "The Ohio State Murders." *The Alexander Plays*.
- Sollors, Werner. "Introduction." *The Adrienne Kennedy Reader*.
- Solomon, Alisa. "Forward." *The Alexander Plays*.
- Wetmore, Kevin J., Jr. *Black Dionysus: Greek Tragedy and African American Theatre*. McFarland, 2003.
- Sanborn, Donald H., III. "McCarter Presents Round House Theatre's "Ohio State Murders"; Video Continues Festival Honoring "The Work of Adrienne Kennedy." *Town Topics*, December 9, 2020. Online. <http://www.towntopics.com/wordpress/2020/12/09/>
- 有泉学宙『アフリカ系アメリカ人演劇の展開』鼎書房、2004年。
- エウリピデス「メディア」(中村善也訳)『ギリシャ悲劇Ⅲ エウリピデス(上)』(代表訳者松平千秋)筑摩書房、1986年。
- 小池美佐子「暴力・女性・身体・他者——エイドリエンヌ・ケネディの劇」『英語青年』(研究社)144巻7号、1998年10月。405-408。

## 塩見允枝子《空間的な詩》とリチャード・ハミルトン

吉村典子

はじめに

1. 塩見允枝子、フルクサス、そして《空間的な詩》
  - 1-1 「グループ・音楽」から「イベント」へ
  - 1-2 「あなたはフルクサスだ！」
  - 1-3 《空間的な詩》
2. 《空間的な詩》におけるハミルトン
  - 2-1 「方向のイベント」の「レポート」
  - 2-2 「影のイベント」の「レポート」
  - 2-3 「レポート」の「編集」：塩見版とフルクサス版

おわりに

はじめに

塩見允枝子 (Mieko Shiomi, 1938-) とリチャード・ハミルトン (Richard Hamilton, 1922-2011) — 両者とも世界的に知られるアーティストである。二人の交流についてはあまり知られていないが、実際には4度の接点があった。そのうちの3回は、塩見の《空間的な詩》(*Spatial Poem*, 1965-1975) にハミルトンが「参加」した時のことである。4回目については後述するが、二人が直接会ったのはその4度目の時であり、ハミルトンが1974年英国から初来日した際に、塩見の自宅(大阪府)を訪ねたことがこれにあたる。いずれもそれぞれの制作上の接点である。

筆者は、ハミルトン研究の一環として、彼の来日について調査を行った際に塩見の自宅を訪ねた(2018年8月)。この時が塩見の《空間的な詩》を知るはじまりでもあった。そして、この「詩」のためにハミルトンが書

いた「レポート」自体も、塩見の手元で大切に守られてきたこともわかった。本稿では、塩見の《空間的な詩》とは何かということ問いながら、この「レポート」の分析を試みる。しかし、それはハミルトンの「レポート」でありながら、塩見の作品の中の一部である。そうした作品をめぐる芸術のありようについてもあわせて考えてみたい。

## 1. 塩見允枝子、フルクサス、そして《空間的な詩》

### 1-1 「グループ・音楽」から「イヴェント」へ

ハミルトンが「参加」した塩見の《空間的な詩》とは何か。まず、それが誕生するまでの塩見の制作活動のみてみたい。塩見は、作曲家・音楽家として知られ、室内楽、パフォーマンス、視覚詩など、今日にいたるまで多くの作品を発表している。東京藝術大学音楽学部楽理科に入学し、学生時代は、旋法やリズムなどの伝統的音楽の形式にこだわらず、むしろそこから離れ、非楽器を用いた実験的な試みを重ねていた。1960年に同じく楽理科の学生だった小杉武久(1938–2018)等とともに「グループ・音楽」を結成している。即興演奏を中心とした活動を繰り返し、楽器・非楽器の演奏のみならず、演奏家の行為(アクション)へと展開し、「アクション・ミュージック」の方へも向かっていく。

こうした様相は、当時すでに欧米で顕在化していた「ハプニング」<sup>1</sup>という芸術動向を想起させる。伝統的芸術形式から離れた偶然性を尊重した表現である。芸術家が行為者となって自然発生的な演技を行なう。塩見自身も当時を振り返って「アル・ハンセン (Al Hansen, 1927–1995)<sup>2</sup>のハプニ

---

<sup>1</sup> この名称は、1959年ニューヨークのルーベン画廊で開催されたアラン・カプロー (Allan Kaprow, 1927–2006) の《6つのパートからなる18のハプニング》に由来し、タイトルに「ハプニング」が使用された最初のイヴェントとされている。

<sup>2</sup> ニューヨーク生まれで、徴兵後アメリカに戻ると、建物の上からピアノを落とす等の「ハプニング」を行った。上記カプロー等とともに、ジョン・ケージ (John Cage, 1912–1992) に師事。ハプニング等については次の著書にも著されている。Hansen, Al. *A Primer of Happenings and*

ング（偶発的要素の強い集団的パフォーマンス）と本質的には似通って」いたことを認めるも、決定的な違いの一つに「グループ・音楽」では「音だけを目的としていた」ことを強調する<sup>3</sup>。加えて塩見自身は、そうした追究の中で、「音から時間の経過そのものへ」と向かっていく。それは、「時間の持続だけが聞こえてくる音楽」<sup>4</sup>であり、「音の肉質みたいなものが薄れていく」、「透明な音楽」であった<sup>5</sup>。さらには、「音でなくとも方法はあるのでは」と「音」という大前提をも解き放っていくのである<sup>6</sup>。

一方、前掲の「ハプニング」のような行為の芸術にも、彼女の中で大きな展開があった。かつて行ってきた即興演奏のような「ステージの上で複数の演奏者たちが互いに無関係に、さまざまな自己目的的な行為を行うこと」よりも、「自己超越」に魅力を感じるようになる。現代音楽からも「グループ・音楽」の仲間からも一旦距離を置いてみた時、「自然を舞台に、その一片と秘かな対話を交わすような、もっと詩的な意味合いをもった行為、いわばアクション・ポエム」を考えるようになったと塩見はいう。「ポエム」つまり詩といっても文学として表現するのではなく、自然の中で実際に、何らかの行為をおこなう。それを塩見は「音楽でも文学でもないけれど、それらの両方の要素をもって、対象と深く係わる方法。自然の断片をそっくり自分のなかに生け捕りにして、一体化することで自己を超越す

*Time Space Art*. New York: Something Else Press, 1965.

<sup>3</sup> 塩見允枝子『フルクサスとは何か―日常とアートを結びつけた人々』（フィルムアート社、2005年）、P.66.

<sup>4</sup> 同上、P.74

<sup>5</sup> 「塩見允枝子 オーラル・ヒストリー」（京都市立芸術大学芸術資源センターアーカイブ）  
[http://www.kcua.ac.jp/arc/ar/shiomi\\_jp\\_1/](http://www.kcua.ac.jp/arc/ar/shiomi_jp_1/)

<sup>6</sup> その結果1963年《エンドレス・ボックス》（開けても開けても、中に少しずつ小さな箱が、際限なく入っている箱）が誕生する。「ディミヌエンド (Diminuendo: 音を次第に小さくしていくこと意味する音楽用語)、そうした次第に減衰していく音の持続を視覚化したオブジェクトとして作った」と塩見はいう（『研究紀要』東京都現代美術館年報15号、2012年）。この箱を用いた映像作品は東京都現代美術館で制作され、現在ニューヨーク近代美術館の以下のサイトでみることができる。

<https://post.moma.org/to-the-people-of-the-30th-century-the-lives-of-shiomi-miekos-endless-box/>

る秘策」<sup>7</sup>と位置づける。

折しも、出会ったナム・ジュン・パイク（白南準 / Nam June Paik, 1932–2006）<sup>8</sup>に、これらの考えを話すと「あなたはフルクサスだ！」といわれたという（「フルクサス」は次項で詳述する）。そして前掲の「アクション・ポエム」と塩見が称していた行為の芸術は、欧米では「イヴェント」という名で呼ばれ、「フルクサス」の人々が既に行っているということも塩見は知るようになる。ここでいう「イヴェント」とは、「特定の行為を明確な意図のもと行うパフォーマンス」のことであり、その場所で起こる一回的な出来事の総体を作品化するものである。塩見の場合は、彼女が書くテキスト（指示書）に従って、参加者がある動作を遂行することにより、その場で起こる出来事を作品としている。塩見自身も、自分のこうした作品のことを「イヴェント」と呼ぶようになっていく。

### 1-2「あなたはフルクサスだ！」

さて、この「フルクサス」については、色々な定義づけがなされているが、中心人物としてジョージ・マチューナス（George Maciunas, 1938–1978）がいたということには異を唱える者はいないであろう。マチューナスは、リトアニア出身のデザイナー、建築家、美術家である。「フルクサス」（Fluxus）という言葉自体は、マチューナスがドイツで行ったコンサート「フルクサス国際音楽祭」（Fluxus Internationale Neuester Musik, 1962）に由来し<sup>9</sup>、前掲のパイクもこのコンサートのメンバーの一人であった。これは

<sup>7</sup> この時の作品が《ミラー・ピース》である。詳細は、塩見前掲書（p.75）を参照されたい。

<sup>8</sup> 1963年夏、塩見が東京の草月ホールで「ニューダイレクション演奏会」を聴きに行った際、「グループ・音楽」の仲間から紹介される。韓国出身のパイクは、日本で音楽史を学んだ後、ドイツ留学等を経て、ジョン・ケージ等との交流の中で、「ハプニング」に参加し、様々なパフォーマンスを重ねていたが、その後ニューヨークにわたり、「フルクサス」およびそれを組織していたジョージ・マチューナスと交流をもっていた。

<sup>9</sup> Fluxusの語源にはラテン語で「流れる、なびく、変化する、下剤をかける」等があるという。塩見は当時を振り返り、次のような言葉を残している。「ヨーロッパのハイ・アート（高尚芸術）とそれを最上と考える社会に対して、下剤をかける、つまり排除して浄化するという意味に、マチューナスは秘かにウェイトを置いていたのではないだろうか。」（塩見、前掲書、p.14）

ヨーロッパ主要都市を巡回することとなり、その名とともに行く先々で出会ったアーティストたちの交流も広がっていった。そうした人々を総称して当時のメディアは「フルクサス・ピープル」とも呼ぶようになった。やがてマチューナスはニューヨークを拠点とし、彼の周囲に多国籍、多ジャンルのアーティストたちが集まり、マチューナスは「フルクサス」をグループとしての意識をもって組織し始めたのであった。

塩見が、パイクの言葉「あなたはフルクサスだ！」をきっかけに、マチューナスに作品を送ると、それらの作品の購入、出版の話が持ち上がる。後述するようにマチューナスは、手作りのマルチプル<sup>10</sup>をつくり、彼のもとに集まってきたアーティストたちの作品を社会に広めようとしていた。こうしたマチューナスとのやりとりの中で、渡米への誘いもあり、塩見はニューヨーク行を決断し、1964年日本を発ち、「フルクサス」の拠点のある「ロフト」<sup>11</sup>を訪ねたのであった。

「フルクサス」は、マチューナスによる集団づくりの試みがあったとはいえ、 маниフェストを出したり、一定の主義を主張したりはしていない。また、同志の芸術家集団でもなかった。緩やかに組織化されていたものであり、関わった芸術家の間でさえも「フルクサス」については、それぞれの持論を唱えている。ここでは、塩見のいう「フルクサス」を紹介することにした。

1. 多国籍の集団であること。
2. グループの境界が曖昧であること。
3. 美術、音楽、詩、舞踊など様々な分野から出た作家がいる。

<sup>10</sup> ここでいう「マルチプル」(multiple)とは、複数生産されたオリジナル芸術作品のことを指す。

<sup>11</sup> Canal Street, Manhattan. 「カナル・ストリート」あたりにはスラム街も多く、嘗ては負のイメージが強いところであつが、因習にとらわれないアーティストや移民たちがここを拠点としはじめ、いまやアートや商業の中心地の一つになっている。そうしたアートの動きの始まりの一つに、フルクサスの「ロフト」は挙げられる。

4. 実際には一つのまとまった主義主張による芸術運動ではなかった。
5. パフォーマンスに重点が置かれていた。
6. 日常のなかでの芸術的体験によって、生活そのものを豊かにしようとした。
7. 既成のジャンルにはまらず、いくつかのジャンルの要素を併せ持つ作品が多い。
8. 表現主義・自己表現を嫌い、シンプルかつ客観的であろうとした。
9. あらゆる可能性を示唆した上で、限定することを避け、受け取り手の判断に委ねることが多い。
10. 観客参加、共同制作など、作家と一般の人々との壁を取り払う試みがある。
11. ゲーム性、ジョーク、ユーモアを重んじた。
12. こうした一般論に対しては、メンバーの何人かが、「いや、それは当てはまらない場合もある！」と即座に異論を唱えるだろう。

(塩見允枝子「フルクサスの12の基準」より抜粋)<sup>12</sup>

こうした「フルクサス」との関わりの中で、塩見は「イヴェント」の「指示書」を書いたり、即興的パフォーマンスを行ったり、多くの活動をニューヨークで重ねていった。しかし塩見は充実した中にも、閉塞感もちはじめる。塩見によれば、当時書いていた作品は「画廊やコンサート・ホールで演奏して見せるためのものというより、誰もが日常のなかで行なうことによって、ありふれた現象や行為を、それまでとは違った感性で捉えてみる」というものであった。但し、「ハプニング」も「イヴェント」も、その場に居合わせたものだけが参加して作品化できる手法である。もっと世界と関わり、より多く人の「参加」により成立する作品を思うようになる。

---

<sup>12</sup> 塩見, 前掲書, p.19と20.

その模索の中で、閃いたのがのちの《空間的な詩》につながるアイデアであった。

それは、地球を舞台と考えて、世界の色々な国にいる人々に、彼/彼女らの日常のなかで同じ「イベント」をそれぞれの解釈で行ってもらおう、というものである。その「イベント」の「指示書」は塩見が書く。地球上の離れたところにいる相手に「指示書」を郵便で届け、それぞれの解釈で行為をおこなう（＝参加する）。その参加者が何をしたかの「行為」についての報告を郵便で送ってもらい（以下、その報告を塩見にならって「レポート」と呼ぶ）、塩見がすべての「レポート」を編集して参加者にまた郵送する。こうして塩見と参加者の交信（一往復半）も成立する。また、その「編集」により参加者間で他の人々がどのような解釈をしたのかをみることができる。そして我々鑑賞者も、世界に広がる人々の行為を一望できるのである。マチューナスは、塩見のこのアイデアを称賛し、「指示書」の送付先として、100名以上の名前と住所を記載したリストを塩見にわたしたのであった。

今もこのリストは塩見の手元にあり、筆者は塩見宅でこれを閲覧した。そこにハミルトンの名と住所も連ねられていた。塩見によると、これらのリスト上の人物は、マチューナスと実際接点があった人ばかりではなく、マチューナスが「フルクサス」だと思ふ人物でもあるという。ハミルトンは、この時点でフルクサスやマチューナスとの関わりはない。この頃のハミルトンは、海外での制作活動は行っていないが、母国イギリスを拠点に1950年代から美術作品を公表しはじめている。特に1956年の「これが明日だ」展で「ポップ」を世に広く提示することになり<sup>13</sup>、一層多くのメディアでもハミルトンの活動は扱われるようになる。芸術事情に精通するマ

<sup>13</sup> 拙稿「リチャード・ハミルトン《いったい何が、今日の家庭をこんなにも違ったもの、こんなにも魅力的なものにしているのか》再考」『英文学会誌』（宮城学院女子大学学芸学部、第47号、2019年）、pp.53-75.

No.1	word event 1965 March – May “write a word or words on the enclosed card and place it somewhere.”
No.2	direction event 1965 October 15, 10:00pm (Greenwich Time) “around the time listed – simultaneous – what kind of direction were you facing or moving towards?”
No.3	falling event 1966 June 24 – August 31 “the phenomenon of a fall is actually a segment of a movement towards the center of the earth. this very moment countless objects are falling. let’s take a part in this centripetal event.”
No.4	shadow event 1971 December 11 – 31 “project the shadow of the letters SHADOW of the enclosed film.”
No.5	open event 1972 July 15 – August 5 “open something which is closed.”
No.6	orbit event 1973 May 3 – 23 “let some person’s portrait go on a orbit by attaching it to a moving object.”
No.7	sound event 1974 March 5, 3:00pm (Greenwich Time) “at the time listed – simultaneous – listen to the sounds around you”
No.8	wind event 1974 October 7 – 27 “make wind or disturb the movement of the natural wind by using some apparatus.”
No.9	disappearing event 1975 June 2 – 22 “observe the natural phenomenon that something is going to disappear.”

表：塩見允枝子《空間的な詩》のための9回の「イヴェント」

チューナスからすれば、ハミルトンの活動は知るところであったろうが、直接的な接点がなくともリストに加えられているところは、マチューナス自身のハミルトンへの関心が高かったことや、マチューナスの人脈を通してハミルトンの住所も知ることになったことを想像させる。

塩見は、このリストをもとに「イヴェント」の招待状(=「指示書」)を送ったわけであるが、塩見にとっては、ハミルトンはもちろん、その他のリストの名の人物に直接に会ったこともなければ、名前さえも知らなかった人物が多数いたわけである。また「指示書」を受け取った人々も、当時塩見を知る人は多くはなかったであろう。それにもかかわらず、1回目から70以上の「レポート」が届いた。ハミルトンからも届いていた。

「あなたはフルクサスだ」といわれた塩見、そしてマチューナスがフル

クサスと位置づけるアーティストたちの間では、後述する塩見の極めてシンプルなテキストによる指示書であっても、インスピレーションが授受される様が見られる。関心や問題とすることが似ているからこそ、互いに反応し合えるのであろう。これらのアーティストたちの共通項が、マチューナスが繋ごうとした「フルクサス」だったかもしれない。

### 1-3 《空間的な詩》

《空間的な詩》は1965年からはじまり、塩見が帰国した後も続けられ、総計9回が1975年まで行われた<sup>14</sup>。先に触れたとおり、毎回塩見が「指示書」を送る。それを受け取った者<sup>15</sup>がその指示をそれぞれの解釈により行う「イヴェント」でもある。参加者は自分がおこなった行為を「レポート」にして塩見に届け、塩見がそれを「編集」してまた参加者に届け、その「編集」を作品として我々も目にするのである。

イヴェントは、各回次のように呼ばれている。即ち「言葉のイヴェント」、「方向のイヴェント」、「落下のヴェント」、「影のイヴェント」、「開くイヴェント」、「軌道のイヴェント」、「音のイヴェント」、「風のイヴェント」、「消えるイヴェント」である。これらの原文イヴェント名と年月、そして「指示書」の要約（塩見の原文のまま）<sup>16</sup>を一覧にしたものが「表：塩見允枝子《空間的な詩》のための9回のイヴェント」である。これら9回のイヴェントに、のべ400人以上が参加した。その「レポート」すべては今日まで大切に保管されている<sup>17</sup>。

<sup>14</sup> 1回目はニューヨークから、2回目と3回目は実家のある岡山から、4回目以降は結婚して住み始めた箕面から発信された。塩見は、この間、結婚、出産、子育てが重なる。こうしたライフステージとの関係で塩見を扱ったドキュメンタリー・フィルムに「ジェンダー差別『考えたことがない』—世界的“女性アーティスト”が背負ってきたもの」（監督：後藤美波）がある。  
<https://creators.yahoo.co.jp/gotominami/0200058884>

<sup>15</sup> 中には、指示書を受け取った人からきいて関心を持ち「参加」した者もいた。

<sup>16</sup> Mieko Shiomi, *Spatial Poem* (1976), p.1.

<sup>17</sup> すべての「レポート」は、塩見によって整理され保管されてきた（現在は国立国際美術館で保管されている）。筆者はハミルトンの「レポート」すべてを塩見宅で閲覧させていただいた（2018年8月）。

2. 《空間的な詩》におけるリチャード・ハミルトン

塩見の《空間的な詩》にハミルトンは、1 回目の「言葉のイベント」、2 回目の「方向のイベント」、4 回目の「影のイベント」に参加している。1 回目の返信をみると、2 回目の「方向のイベント」の「指示書」が届いた時点でも、まだ考え続けていたことがわかる。これについては稿を改めることにし、本稿では「方向のイベント」と「影のイベント」に参加したハミルトンの「レポート」に絞って詳細をみていきたい。

2-1 「方向のイベント」の「レポート」

「方向のイベント」は、表の「No.2」にあるように「1965年10月15日、グリニッジタイム（GMT）午後10時」頃に、皆がどんな方向にむかって動いていたか、あるいは面していたかを問うものである。これには各都市の時差の一覧表も添えられている（図1）。

ハミルトンの「レポート」には以下のことがタイプ打ちされ、塩見に届けられた。

My left foot points N my right foot points NNE both shins  
face N my thighs are in a horizontal plane with their axis  
N/S left forearm and hand point NNE right forearm and hand  
point NNW chest and belly face N and face faces NE tilted up  
45° I am moving in a Southerly direction at a speed of 75 mph

SPATIAL POEM No.2

Around the time listed below  
what kind of direction are you moving  
or facing toward ?  
— either performance or spontaneous —  
please send me a report about it  
which will be edited on a world map

New York	5:00 pm	Oct. 15, 1965
Amsterdam	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Copenhagen	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Paris	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Japan	7:00 am	Oct. 16, 1965
Stockholm	11:00 pm	Oct. 15, 1965
London	10:00 pm	Oct. 15, 1965
Scotland	10:00 pm	Oct. 15, 1965
Vienna	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Nice	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Rome	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Moscow	1:00 am	Oct. 16, 1965
Berlin	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Los Angeles	2:00 pm	Oct. 15, 1965
Montreal	5:00 pm	Oct. 15, 1965
India	3:30 am	Oct. 16, 1965
Barcelona	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Cologne	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Prague	11:00 pm	Oct. 15, 1965
Chicago	4:00 pm	Oct. 15, 1965
Mexico city	4:00 pm	Oct. 15, 1965
Brazil	7:00 pm	Oct. 15, 1965
Iran	1:30 am	Oct. 16, 1965
Sydney	8:00 am	Oct. 16, 1965
Hawaii	0:00 pm	Oct. 15, 1965
Greenland	7:00 pm	Oct. 15, 1965
etc.	simultaneous	

図1 塩見允枝子「方向のイベント」の指示書（部分）  
1965年 個人蔵

just S of Hitchin 40 miles N of London

[\*原文のまま引用]

私の左足先は北を向き、右足先は北北東。両脚のむこうずねは北を向き、太ももは南北を軸に水平にある。左の前腕から指先は北北東、右の前腕から指先は北北西の向きにあり、胸や腹は北に面し、顔は北東の方向に45度上方を向いている。私は南方向へ移動中で、時速75マイルで、ロンドンの北40マイルのヒチンの町の南を丁度過ぎたところである。

[\*筆者訳]

四行目までは、おおよそ北方向をむいているハミルトンをおそらく誰もが想像するであろう。「太ももは水平」とあるので座っているのであろう。そして右つま先がやや外側に開き、両腕は、両脇もしくは膝の上に内向きにおろしている。顔は右上前方を向いているようだ。イメージの中で北方向をむいて座るハミルトンがみえてくる。

しかし五行目に進むと、直ちにそれとは逆の「南方向へ移動」するのである。ハミルトンは北を向きながら南へ移動しているのだ。しかも「時速75マイル(=時速120km)」という高速である。しかしこの時速から車両での移動を思わせる。進行方向と逆向きに座ることが可能な列車等での移動であろう。謎解きのような「北を向きながら南への移動」であるが、我々の日常と照らし合わせると解けていく。

ここで「南方向」のベクトルがイメージされたところで、しかし最後の六行目に再び「北」が、さらに「南」が登場する。ハミルトンは南下しているが、その位置はロンドンを基点とすれば「北へ40マイル(≒64km)」になり、ロンドンの北方面に位置するヒチンの町からすれば、「ヒチンを丁度過ぎたところ」であるから町の南の位置にあたるわけである。

一見、道理に合わないようであるが、よく読むと現実世界のそれであることがみえてくる。

この六行には、「北」方向「南」方向というように、複数の、しかも対峙する方向が行き来し、しかし同時に、ハミルトン自身の主体的な方向の動きはないことにも気づく。北へ、南へ、そして動と静と、巧妙に組み立てられた六行のようでもある。ハミルトンによくみられる機知に富んだ描写であると位置づけることも可能であろう。しかし、方位だけでなく、上下、左右、垂直水平、角度など、空間の中で対象を規定する言葉を用いていることにも気づく。そしてこの「イヴェント」の共通の前提として、塩見の指示する「時間」がある。即ち、カントが言うような「空間と時間」において対象を認識させているのである。それによって我々は、ロンドンに向かって南下する列車の、進行方向とは反対を向く座席にすわり、(ハミルトンの) 右上前方の(おそらく車窓) 風景を見ているハミルトンを文字から認識できるのである。ハミルトンが基点となって方向が表され、しかし、最終行(六行目)で自身を鳥瞰的にとらえ、ハミルトンが主体から客体に逆転することにより、方向も逆転するのである。それぞれの基点からのハミルトンが位置づけられている。

一方この「レポート」の内容は、この「イヴェント」のために仕組まれた行為ではなく、「イヴェント」の趣旨にあるとおり、ハミルトンの日常の中でのこの時を表したものであるべきであろう。ハミルトンは生まれも育ちもロンドンで、結婚後もロンドンに居を構えている。イングランド北部にあるダーラム大学(現ニューカッスル大学)で教鞭を執った1953年から1966年まで、ロンドンとニューカッスルの約400キロを鉄道で行き来しながら、週末はロンドンの自宅で過ごすことが殆どであった。「レポート」の中に記載されたヒチンは、ロンドンとニューカッスルを結ぶ鉄道沿いの町である。「方向のイヴェント」で指示された日時「1965年10月15日午後10時」は、金曜日にあたり、午後10時であるから、ダーラム大学

の仕事を終えて夕方列車に乗れば、(ロンドンの北 65 km にあるヒチンを通過したところであるから)あと 1 時間ほどで帰宅というところであったと想像することもできる。少なくとも、ハミルトンにとっては、10 年以上続く日常の断片であったことは間違いない。

また、絵画制作においてハミルトンは、ダーラム大学に着任する頃から、一つの平面に、「移動」を表すことを模索しており、ロンドン—ニューカッスル間の「通勤」が開始する 1953 年からは、車窓からみえる風景を対象に、この問題に取り組んでいる。具体的には、車両等に乗って移動する際に、進行方向と逆の方向に動いているように見える風景を扱い、かつ、周りの風景が移動しても、視点おいた対象は一定の時間は不動であるように(目が追っていくため)みえる視覚の問題を作品に表している<sup>18</sup>。これは主体と客体の問題でもあり、主体によって客体は認識され、主体の見方によって客体も変わるのである。そのことは「レポート」の最後の行における、方向の転換にも表れているであろう。「移動」や「方向」は、ハミルトン自身の作品においても意識して取り組んでいたテーマの一つでもあったのである。

ハミルトンは、単にその時の行為を「レポート」に記載しただけでなく、方向という概念について考えていたことを用いて、その時の自分を描写したのではないだろうか。一時点の一人の人物の行動でありながら、ハミルトンの「レポート」には複数の方角が示されているのは、対象をみる基点により変わるという主体と客体の関係性をも暗示するものとも考えられる。ハミルトンの 1950 年代からの制作上の模索のプロセスに従って言えば、上記の「基点」を「視点」と置き換えることも可能であろう。つまり視点により対象の見え方や位置づけは変わり、同時に視点によりその対象が固定されるのである。ここで言う「固定」は、物事の見え方や物事の位

<sup>18</sup> Richard Hamilton, *Transition I, II, III, & IIII*, 1954.

これは写真にうつる世界と人間の目にみえる世界との違いでもあり、そのことも作品の中で扱っている。

置づけと置き換えることもできるであろう。

従って、この六行の「レポート」は、ハミルトンの1965年10月15日午後10時の向きなのであり、彼のその時の「向き」をめぐる思考を暗示するものである。その意味でも、ハミルトンの日常の行為をとらえた「レポート」であるといえるであろう。

## 2-2 「影のイベント」の「レポート」

「影のイベント」で塩見は、黒インクで「SHADOW」と印字した透明のフィルムを同封し、その「SHADOW」の影をつくる、つまり「影」の影をつくるという「指示書」を出した(図2)。そして、様々な場に映し出された「SHADOW」の多様な影について、参加者の多くがそれらを写真撮影するかたちで「レポート」を作成し、塩見に届けた。

ハミルトンは、「レポート」を書いた紙の上に「SHADOW」の影を映してポラロイド・カメラで撮影し、その写真を「レポート」に添付して返信している(図3)。「レポート」には、塩見が指示書でレポートに掲載すべき情報として挙げたことを項目にして、実際にハミルトンが行ったことが簡潔にまとめられている。即ち、「場所」(place)はハミルトン自邸のスタジオ、「光源」(light source)はライツ・プロジェクター、「露光時間」(dura-

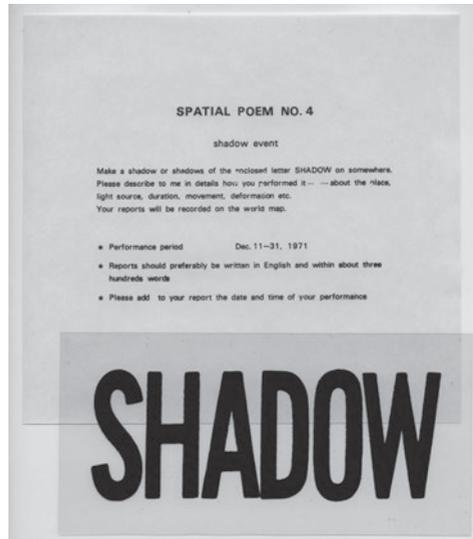


図2 塩見允枝子「影のイベント」の指示書と「SHADOW」(8.6 × 17.9 cm)のシート  
1965年 個人蔵

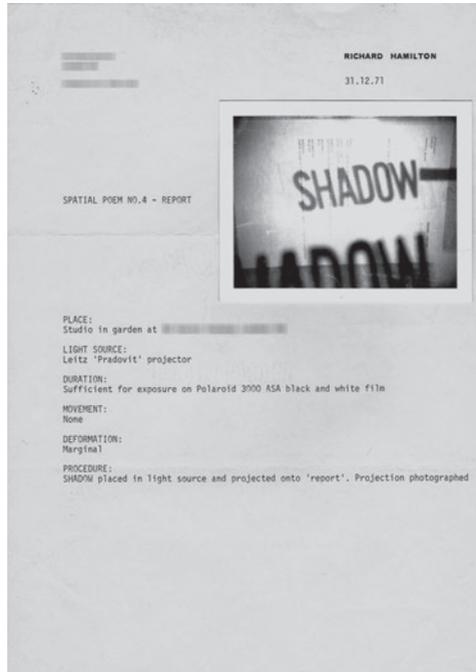


図3 リチャード・ハミルトンからの  
「影のイベント」の「レポート」  
1971年 国立国際美術館蔵

tion) は白黒ポラロイドフィルム感光時間、「動き」(movement) はなく、「歪み」(deformation) は殆どない。「手順」(procedure) については次のように記されている。

SHADOW placed in light source and projected onto 'report'. Projection photographed.

SHADOW (の文字のシート) を光源の前におき、「レポート」に投影。  
投影を撮影。 [＊筆者訳]

添付の写真からは一見して、一つの影が捉えられているように見えるが、「レポート」の内容から複数の影があることがわかる。筆者和訳（前掲原文下）の漢字からも読み取れるように「投影」したものが「撮影」されている。これについては、他の参加者にも、つくった影を写真に撮って返信したものもあるので、それらの例にも同じことが言えるかもしれない。しかし、ハミルトンは記録のために写真を用いたのではなく、光と影、それにより成り立つ写真のメカニズムから、意識的に撮影という手法をとったのではないだろうか。

ハミルトンは、カメラや写真の仕組みに早くから関心があり、そのことは彼の多くの作品を通して示されている<sup>19</sup>。プロジェクターによって映し出された影、それを捉えた写真にうつる影もまたその影なのである。さらに、その写真にうつりこんでいる「SHADOW」の文字も、その写真においては「SHADOW」の文字の影なのである。つまり、この写真の表面にあるものすべてが影であり、ハミルトンは一つの「SHADOW」から同時（厳密に言えば露光時間内）に複数の影をつくったことになる。従って、「レポート」に投影されたものだけが影ではないのである。それらの影のためには写真のメカニズムが必要であり、故に「投影を撮影」（“Projection Photographed”）したことも含めて「手順」に書き、「レポート」に記載しているのである。ではなぜ、ハミルトンは「レポート」に投影したのであろうか。

この「影のイベント」は、幼い頃我々が影絵や影踏遊びをしたように、身近で遊戯的な性格もあわせもつ。実際影遊びをしている子供をとらえた参加者（Bake László, Budapest）による写真もみられる。しかし、この「イベント」の最も興味深い点は、「SHADOW」の文字を使ってその影（SHADOW というかたちの影）をつくるため、換言すれば、「シニフィアン」

---

<sup>19</sup> *I'm dreaming of a white Christmas* (1967), *I'm dreaming of a black Christmas* (1971) 等、多数ある。

(意味しているもの)を使って、「シニフィエ」(意味されているもの)をつくるため、シニフィエがまたシニフィアンにもなりうることにもある。ハミルトンもそのことを意識していたのではないか。その特色を最大限活かすために、「SHADOW」の文字(意味しているもの)と映し出されたSHADOWというかたちの影(意味されているもの)が、できるだけ形式的に一致するように、「歪み」が「殆どない」ようにしたのではないか。歪みが殆どないことを書いた「レポート」の上にSHADOWを投影していることから、投影の前から歪みをなくす構想がハミルトンにはあったといえる。そして、その影がシニフィエとしての影である所以は、影をつくる行為がなされていない時は、そこには見えないことにある。それは実際の影と、写真の影との違いでもある。

従って、「レポート」に投影した影をとらえた写真を添付して、その「レポート」を塩見に届けることにより、そして、影をとらえた写真とともに、「レポート」の上にあった影がないことを見ることにより、実際の影がそこにつくられたことがわかるのである。ハミルトンによるこの「レポート」の紙には、影がないことが影があったことなる、というパラドクスも有するのである。

ハミルトンは、平面作品において、物理的には一つの面でありながら、そこにいくつかの層をつくるという重層性を得意とする作家であり、また、ハミルトンも「画家として関心があるのは、イリュージョンとパラドクスの領域なのだ」<sup>20</sup>とよく言うように、逆説を用いた作品を多数試みている。こうしたことからこの「レポート」にもまた、ハミルトンの特有の思考とアプローチが如実に表れているのである。

### 2-3 「レポート」の「編集」：塩見版とフルクサス版

こうしたハミルトンの「レポート」を含め、参加者からの返信は毎回塩

<sup>20</sup> Richard Hamilton, *Collected Words 1953-1982* (London: Thames & Hudson, 1982), p.75.

見が「編集」して《空間的な詩》になる。実際の「編集」については、4回目の「イベント」までマチューナスも関わっている<sup>21</sup>。マチューナスは、ニューヨークを拠点としはじめた頃から、作家たちの作品を出版物にしたり、廉価なプラスチックボックスに収納して独自にデザインしたラベル等を貼り、手作りのマルチプルにしたりしていた。塩見の「編集」も、マチューナスのデザインで、フルクサス・エディションとしてリリースされた（ここではこれを「フルクサス版」と呼ぶ）。また、1976年に塩見は、9回を「イベント」ごとに編集し、すべてを1冊にまとめ出版（図4）している（「塩見版」とする）。

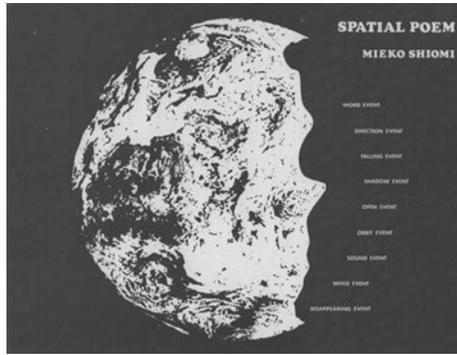


図4 塩見允枝子『空間的な詩』自家版の表紙  
1976年 21.0 × 27.3 cm 個人蔵

地球をステージとした「イベント」をイメージさせるべく、世界地図上に、あるいは冊子の見開き上に一望できるよう「レポート」内容を配置させる編集が主となっている。これを我々が全体を眺め、細部を読み味わい、また全体をみる。この繰り返しにより、紙面上の地球のあちらこちらから響きが湧き上がってくる。それが《空間的な詩》である。前掲の「方向のイベント」と「影のイベント」について、その「編集」をみてみよう。

「方向のイベント」の塩見版は、世界地図を背景にして、参加者が行為をおこなった地の上に、矩形の枠をつくり、その中にレポートの文を入れるというシンプルな編集である。ハミルトンの例の他には、「ロングア

「方向のイベント」の塩見版は、世界地図を背景にして、参加者が行為をおこなった地の上に、矩形の枠をつくり、その中にレポートの文を入れるというシンプルな編集である。ハミルトンの例の他には、「ロングア

<sup>21</sup> その後は、体調の問題で継続が困難となった。



図5 「方向のイヴェント」の頁（塩見允枝子『空間的な詩』自家版，1976年）

イランドから岡山（指示書の差出住所）の方を向いていた（Joe Jones）、「ニースで4杯目から5杯目のビールに向かっていた（Serge Oldenbourg）」、「鼠を追っかけて寝室の中をぐるぐる回っていた（Bengt af Klintberg）」、「ニューヨークのエレベーターの中で回転椅子に座って高速でぐるぐる回りながら、上階に向かった（George Maciunas）」、「遠くて耳に届かない音に向かっていた（Mieko Shiomi）」等があり、「1965年10月15日午後10時（GMT）」の人々の営みが、一斉に示されている（図5）。それが「向き」を語る内容であるだけに、我々にむけても想像を喚起してくるのである。「同時」でありながら、それぞれの解釈の「向き」であり、それぞれの「向き」には関係性がないため、どこかで融合されたり吸収されたり、また反発し合うことなく、それぞれが独立したままである。そのため地図上のあちこちから、様々なベクトルが想像の中で湧き上がってくるのである。

一方、フルクサス版は、羅針盤のような円環が方位を暗示させながら、レポートの内容が示す方位に合わせて文をならべている。方向に置き換えられないものは、その円環のまわりに弧を描くように文を配列させているものもある（図6）。視覚デザイン的にも工夫がなされている編集といえる。しかし、前掲の塩見版は我々の想像の中で「向き」が湧き上がってくることに對し、このフルクサス版は、そのデザインが「向き」を示していると

ころも多々ある。参加者それぞれの解釈の「向き」が、フルクサスの解釈の「向き」によって視覚化されているといってもよいかもしれない。それが、参加者それぞれの言葉から発せられる「向き」を見えづらくさせているようにも思える。

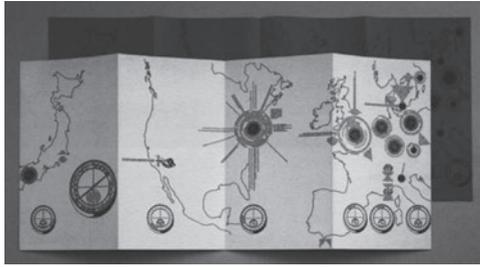


図6 塩見允枝子「方向のイヴェント」(フルクサス版) 1976年 36.7×82.2cm (手前)  
図版出典『フルクサス展 ―芸術から日常へ』(うらわ美術館, 2004年), p.27.

ハミルトンを例にあげれば、フルクサス版では、「レポート」に書かれた方角を表す語が、羅針盤の方位の位置と合うように円環状に文字が配置されている(図7)。「向き」が方位に転換され、それが視覚デザイン的に示されている。一方、塩見版は、文字の配置はデザインされていない。「レポート」のテキストを読むことで、我々がそれぞれの日常を想像し、それぞれのイメージの中で行為の「方向」がみえてくる。ハミルトンの場合の、数行の中に様々な「向き」がみえてくる特殊性は、全体を一覧するなかでさらに際立ってもくる。

次に「影のイヴェント」の「編集」をみてみよう。「レポート」にはそれぞれの参加者がつくりだした影をとらえた写真をつけたものが多いため、その写真等を見開きに配置させるような編集が塩見版にみられる(図8)。一方、フルクサス版は、「レポート」をマイクロフィルムに収め、ビューアーをつけている(図9)。おそらくレポートの一枚一枚を鑑賞できるものと思われる。それが白い小さなプラスチックのケースに納められ、作品の小箱となっている。

塩見版は、様々な影を一望でき、ここでも多様性を一面で鑑賞できる編集法である。しかし、参加者が提出した「レポート」のままではなく、「編



集」では写真の周囲にレポートの文字情報を配置させている。写真の意図をそこから読み取ることができるのであるが、ハミルトンの「影のレポート」の場合は、詳述したように「レポート」全体を載せることで彼の意図が成立するところがある。つまり、「レポート」上に影が「ないことがあること」になるというパラドクスは、影が映っていない「レ

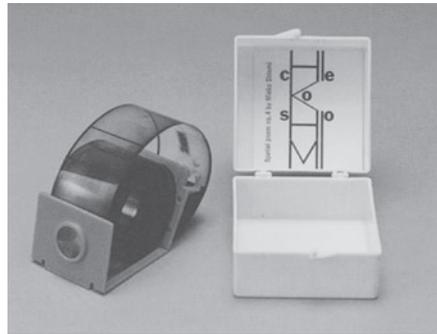


図9 部塩見允枝子「影のイベント」(フルクサス版) 1972/3年  
図版出典：『フルクサス展 ―芸術から日常へ』(うらわ美術館, 2004年), p.28.

ポート」が塩見に届けられ、鑑賞者が見てはじめて成立するのである。塩見版は、上述したスタイルで編集されているため、ハミルトンの「レポート」全体をみることはできない(図8の右下)。一方、フルクサス版については、レポート一枚一枚の全体をとらえたものがリールになっているとすれば、ハミルトンの意図には叶うものであったといえるであろう。

筆者はまだマイクロフィルムをのぞいて確認はしていないが、塩見宅で、ハミルトンの実際の「レポート」を見せていただいた。「編集」ではないかたちであるが、塩見および現在の保管先の国立国際美術館の双方の許可をもって、本稿の「図3」として掲載することにより、ハミルトンの「レポート」のパラドクスをここで成立させたい。

おわりに

1960年代を中心に当時よくみられた「イベント」は、その場に居合わせたものだけが参加して作品化するものであったが、本稿で取り上げた塩見の「イベント」については、参加者の行為が作品ではない。塩見の

「指示書」にはじまり、参加者の「行為」があり、その行為を参加者が「レポート」にし、塩見がそれらを「編集」し、「詩」となるのである。その構成要素は多数の参加者の行為であり、塩見の言葉を借りれば「大勢の人々の視点によって切り取られた日常の断片たちが作り出すイメージの重なり合い」<sup>22</sup>である。その「重なり合い」は、塩見等が編集した地図上の空間的広がりの中で生じてくる。故に、「空間的な (Spatial) 詩」なのである。この「重なり合い」を、塩見が作曲家という背景からも「交響詩」と呼びたいところであるが、それぞれの解釈での行為であり、前述のとおりそれぞれは関係性はない。そのため、「交響」というような響き合いはない。しかし、無関係であるからこそ、それぞれの響きが、そのどこかの響きに影響されることなく、また融合されることもなく、それぞれが我々鑑賞者に向かって響いてくるのである。そして、それを鳥瞰的にみたととき、それぞれの響きのパターンが、全体であらたな絵図をつくり出している。ハミルトンの「レポート」の分析は、《空間的な詩》を構成する響きの一つの考察にあたるであろう。さらに一つ一つをハミルトンの「日常」に照らし合わせてみることにより、あらたな側面が見出され、ハミルトン特有の重層性をもってまた響き出すのである。

さて、最初に触れたとおり、塩見とハミルトンは、この「イヴェント」以外の時に直接に会っている。1974年のことであるので、ハミルトンが3つの塩見の「イヴェント」に参加したあとである。ハミルトンは大阪の企業との仕事<sup>23</sup>で初来日した時であるが、塩見によれば突然ハミルトンから連絡があり、塩見の自宅を一人で電車で訪ねてきたという。「指示書」の発信元をみて訪ねてきたのであろう。その時の記録として、今日まで確かに残っているのが、塩見自邸でのハミルトンの写真である。ハミルトンの

<sup>22</sup> 塩見, 前掲書, P.113.

<sup>23</sup> これについては拙稿「リチャード・ハミルトンの《Lux 50 – functioning prototype》」(『美学』2020年, pp.145–156)を参照されたい。

依頼により、塩見がハミルトンのポラロイド・カメラをつかって撮影したものだ。これはのちにハミルトンにより編集され『ポラロイド・ポートレート』<sup>24</sup>として出版された。こうして塩見もまたハミルトンのプロジェクトに「参加」したことになるのである。ハミルトンのポラロイド・ポートレートについては、稿を改めて論じることにしたい。

### 【付記】

本研究は、JSPS 科研費 19K00198 の助成を受けたものです。塩見允枝子氏からは、多くの資料や情報に加え、温かい励ましの言葉も頂戴しました。図版については国立国際美術館学芸員諸氏より尽力賜りました。研究を支えてくださった方々に、記して謝意を表します。

---

<sup>24</sup> ハミルトンは1960年1月にポラロイド・カメラを初めて手にした。そして「ポラロイド・ポートレート」というプロジェクトを1968年に開始した。交流があったり、旅先で出会ったりしたアーティストたちに、自身を撮影してもらおうというプロジェクトである。総勢128名によって撮影されたハミルトンを掲載した写真集 (*Polaroid Portraits*) が4巻にわたって出版された。出版したものは、撮影したアーティストに届けられている。塩見は第2巻を所蔵し、そこには塩見撮影のハミルトンの肖像写真(塩見邸床の間前に座る)が掲載されている。

## Attitudes on English Taboo Language at Miyagi Gakuin Women's University

Jennifer Green

**Abstract:** Despite taboo language being a highly used and useful part of the English language, it is often kept out of the language classroom due to perceived associations with antisocial behavior and negative attitudes about its use. One of the key attitude holders on this subject are the learners themselves, to which the language is being taught. With background factors that may cause either positive or negative attitudes towards taboo language, the views of students at a Christian women's university in Japan were investigated. Participants showed strongly negative views of taboo words in theoretical use, though many held interest in the subject regardless and most reported views of English taboo language knowledge as necessary. When given options for the subject to be discussed at school, most preferred inclusion of the subject, though in an optional setting. Discussion follows on why these results may have been found. The study concludes with comments on pedagogical implications from the results and directions for future study.

### Introduction

One of the defining features of taboo language is that the words are so taboo that they warrant restriction, whether by social judgement or written law. Despite time having changed what is considered profane and how we use profanity (Mohr, 2013), negative attitudes towards the language remain the same. We can see such attitudes today from censorship of media via broadcast regulations, punishments for students using profanity in school, and backlash against public fig-

ures that use it. It is a logical leap that it would then be avoided in the foreign language classroom as well, with potentially strong consequences for those that use it poorly. However, a case has been made by Horan (2013) for taboo language to receive a place in foreign language education. Here, I direct the attention specifically to that of English language education at Miyagi Gakuin Women's University, for the purpose of finding what beliefs on profanity the students there hold and how they see the subject fitting into language education at their current institution. NOTE: While some would distinguish the terms "taboo language", "taboo words", and "profanity", the present article uses them synonymously.

## Literature Review

### *The role of taboo language in English*

When looking at the use of taboo language in English, there are two things to consider: the functions of profanity for language expression and the frequency of its use, or as Jay (2009) called it, the "utility" and "ubiquity" of profanity. The former entails the general function of taboo words as being a strong emotional signal, resulting in either positive or negative social outcomes. In English, this can take several forms, from intentional dysphemistic, euphemistic, abusive, idiomatic, and emphatic uses, to unintentional cathartic uses (Finn, 2017). With such utility, it is no wonder that it makes up a large percentage of use in the language, estimated to be between 0.2-0.7% of English used (Jay, 2009; Beers Fägersten, 2012). While this may not seem like much, if considering the average rates of speech (Hayati, 2010; Peelle et al., 2004), it would mean that on average one taboo word is spoken for every 1-3 minutes of continuous speech, depending on the speed of the speaker.

For English learners in Japan who may have little contact with English

speakers, most natural English input that they have is in the form of popular media and the internet, both places where profanity is commonly found (Cressman et al., 2009; Wang et al., 2014). Even sectors of the internet that attempt to censor profanity still contain some due to flawed detection programs (Nobata et al., 2016). So, if students encounter English online, they are very likely to also encounter profanity. In fact, it may be difficult for anyone that watches movies or spends time online these days to avoid English taboo language unless they strictly avoid English media and websites in general. If a learner attempts to use this type of input to further their language studies, they may inadvertently learn taboo words without awareness of their taboo status.

#### *Mixed messages on taboo language use*

Horan (2013) states that first language and culture may influence how second language profanity is perceived. While Horan discusses German, similarities can be found in the Japanese borrow-words of *oh my god* and *bitch*. The former, *ōmaigā* in Japanese, has the same problem as the borrowed German word, *fuck*, having lost its taboo status after being brought into the language. Japanese speakers may encounter embarrassment if they use the phrase in English and the listener either shows surprise or becomes offended by its use, particularly if spoken around children. Furthermore, the use of the phrase may lead the listener to assumptions about the speaker's religious views, unbeknownst to the speaker.

In the case of the latter word, *bicchi* in Japanese, offensiveness remains and may in fact now be more offensive than its English counterpart. According to the Oxford English Dictionary, the word *bitch* is defined as being "applied opprobriously to a woman; strictly, a lewd or sensual woman. Not now in decent use; but formerly common in literature. In mod. use, *esp.* a malicious or treacherous woman; of things: something outstandingly difficult or unpleasant" ("Bitch", n.d., para.

2). The current definition in Japanese matches the formerly common English definition, having remained unchanged from when it was originally borrowed, more akin to the word *whore* in meaning and offensiveness. Converse to the previous borrow word, Japanese listeners may be the ones surprised when encountering the English term *bitch* to find it used more casually than expected and perhaps even more confused with its occasional use as a reappropriated word (Galinsky et al., 2013) or not in relation to a woman at all (e.g., *That essay was a bitch to finish!*). Alternately, when it comes to words that are entirely new to learners, there may be confusion caused instead by outside forces such as with translations that do not convey the offensive tone of the message being translated. For movies, taboo language is often omitted for brevity or due to difficulty of translation. Or, when translated, the level of offensiveness of the word may become either lost or overinflated when an appropriate equivalent cannot be found, all likely to mislead learners (Cintas & Remael, 2014; Furukawa, 2009).

If students go looking on their own for information about taboo language, they may encounter conflicting images of how taboo language is used. Horan (2013) found there to be many English books and websites dedicated to the teaching of English profanity, but that they are often presented in a light-hearted manner, focusing on the “coolness” factor of taboo language to gain learners’ interest, and are often clearly targeted at a young male audience (e.g. Kenny, 2017). On the other extreme, searching in Japanese instead produces blogs from popular English language learning websites that list taboo words as something to be used under no circumstances. One such post was made by the commonly used two-way English-Japanese translation website, Weblio (2016), in their English Conversation Column section, with the translated title *No-Good English Words, Knowledge of Prohibited Words that Should Not be Said*. The post is written with the austere

message that while necessary to know, the words described and their associated topics can be severely triggering for listeners. The advice given in the article is to learn the words for the sole purpose of recognition, to not attempt to learn how to use them, and to keep distance from all those that do use them.

When put together, these opposing materials create an image of the profanity user as a young male delinquent that does not care what other people think and does not mind picking fights. This image often associated with profanity is likely one of the barriers preventing it from being a subject of study in the language classroom. And while there are profanity users out there that would fit this description, and it is unlikely to find a delinquent teen who doesn't use profanity when picking a fight, it discredits the hundreds of millions of others that use profanity daily in socially positive ways. Most do not use this language because it is cool or edgy, but because it serves one of many communicative purposes.

#### *Attitudes on taboo language*

As countless scholars acknowledge (Allan & Burrige, 2009; Ashwindren, Shankar, & Zarei, 2018; Brown & Alderson, 2010; Blamire, Laturnus, & Perez-Leon, 2013; Dewaele, 2015; Dewaele, 2017; Beers Fägersten, 2012; Janschewitz, 2008; Kapoor, 2016; Liyanage et al., 2015; Thelwall, 2008; Wang et al., 2014; this list is not exhaustive), there are many factors that affect profanity perception and usage. These factors include gender, age, social class, level of education, social group affiliation (including religious groups), race, sexual orientation, nationality, and personality. For second-language English speakers, there are the further factors of age of onset for learning the language, the context of language acquisition (more naturalistic versus more classroom instruction), first language background, target language proficiency, and experience living in an English-speaking country (Dewaele, 2016). In addition to these are factors of the so-

cial situation, including social status of the speaker and audience, and the general setting of the usage (e.g. place, topic of conversation, tone of interactions, listener reaction, etc.) (Beers Fägersten, 2012; Jay & Janschewitz, 2008). Finally, response may be mediated by perception of the listener (i.e. perceived or assumed background factors; Horan, 2013; Jacobi, 2014; Blamire, Laturmus, & Perez-Leon, 2013).

The current study being set at a Christian women's university means that the factors of particular relevance are age, gender, religion, foreign language learner status, experience living in an English-speaking country, and perceptions of the listener. Youth is positively correlated with profanity usage. Those in their teens have the highest usage of profanity, both for native and non-native English speakers, with especially high usage around friends and when alone (Dewaele, 2017). Women have been found to use less profanity overall, generally milder profanity, and on the receptive end are viewed more harshly for its use (Jacobi, 2014). Religion is also negatively correlated with usage and attitudes of taboo language, with a long history of words stemming from religious ideas creating the blasphemous and therefore provocative nature of the words (Mohr, 2013), with negative association between religion and taboo language continuing today (Beers Fägersten, 2012). While not all students are religious, attending a religious school may affect attitudes. Dewaele (2016) found that foreign language learners are less likely to use English taboo language and generally rate them as more offensive than first-language English speakers, likely from a "safe rather than sorry" perspective. He also found those who had lived in an English-speaking country for greater than 3 months had different perceptions and frequency of usage of different English taboo words, likely in part from attitudinal differences stemming from their experiences abroad. Finally, perceptions of the listener play a great role in much of language learning in Japan, often limiting what students are willing to do or comment

on if it has the potential to cause loss of face (Haugh, 2007), something inherent with profanity.

As of present, little research has been done on English taboo language attitudes with EFL populations, with most focused on perceived offensiveness of given words (Dewaele, 2016; Kapoor, 2016; Irwin, 2019) rather than attitudes about the topic in general. One study performed by Charkova (2007) looked at attitudes towards English slang usage with Bulgarian secondary and tertiary learners, finding generally positive views. However, the study specifically avoided the use and discussion of taboo words despite them being prevalent in English slang. One Japanese study done on Japanese taboo language (Ohkubo & Yatougo, 2005) found that students were willing to use taboo words in everyday conversation dependent on the offensiveness of the type of word, but were generally very against its use for themselves in conflict situations, with the background variable of student major affecting ratings. With general willingness to use taboo words, it is possible that the students in the present study have positive attitudes about them. However, the many factors that often correlate against usage and positive attitudes may be a stronger driving force. Therefore, the present study is being conducted to see what attitudes are held among students at Miyagi Gakuin Women's University.

## **Research Questions**

Q1: What attitudes do first-year Miyagi Gakuin English Department students have about English taboo language?

Q2: Does experience abroad correlate to positive attitudes on English profanity with these students?

Q3: Where do these students see English profanity to best fit in English language education at Miyagi Gakuin Women's University?

## Methods

### *Participants*

The questionnaire was distributed to the participants in-class (via a virtual meeting platform) by the supervising teacher to all 1st-year English undergraduate students in the English Department at Miyagi Gakuin Women's University (MG). Students who did not wish to participate could do so by refusing consent at the beginning of the questionnaire or by not completing the questionnaire. All surveys were completed in the single session. Data from students in the second and third-year retaking English courses was removed, as was data completed before the distribution time, leaving 78 out of 80 female first-year students as participants, an almost perfect completion rate. All students were aged 18-19 except one 20-year-old, and all reported Japanese as their only mother language. Of the 78, 22 reported experience abroad.

### *Instrument*

The instrument was an online questionnaire with four sections. The first section was included to confirm the participant populace to be 1st year students at MG. The second collected other background information on age, native language, and experience abroad. To establish the meaning of taboo language, a quick description was given before the third section in a way that would be easily understood for the target audience with example words chosen for their high frequency of usage across varieties of English (Beers Fägersten, 2012; Dewaele, 2015; Andang & Bram, 2018) . The third section then was composed of 12 statements, with an accompanying 7-point Likert scale labeled from "Strongly disagree" to "Strongly agree". A 7-point scale was chosen based on the findings of Lee et al. (2002) for its higher validity with Japanese respondents. Statements were adapted from Charkova (2007) to be about English taboo language rather than English

slang in general with additional items enquiring on the necessity of English taboo language and addressing attitudes seen in Japanese language learning blogs.

The final section had students rank four options for the discussion of profanity at MG on which they preferred most. The options were discussed with a MG staff member to ensure that no items were included that would not be possible at the university, and were presented in random order as to reduce chance of bias. An additional, open-ended question asked if they had a better option than those already presented. The questionnaire was distributed in English, though students were instructed to use the available Japanese version (which had been back-translated to ensure integrity of the translation).

## **Results and Discussion**

### *Question One:*

Questionnaire data was coded scaling “Strongly disagree”=1 to “Strongly agree”=7. Reliability analysis was performed, and a coefficient alpha of 0.777 was found after three items were removed, confirming adequate internal consistency, leaving 9 intact items. Categories of agreement and disagreement were condensed to create a visualization of the data, as found in Chart 1.

While a majority reported having interest in the topic, respondents tended to be much less committal about making a statement on their friends’ interests, and were more likely to answer negatively when doing so. This may have been a face-saving tactic, not wanting to assume of others an interest in a potentially threatening topic, or it could be that the topic of discussion had never been broached and was therefore unknown or assumed to be negative. This negativity may have biased the next answer, causing the low degree of agreeance with the idea of using English taboo language with friends and peers, despite the findings

of Ohkubo & Yatougo (2005) in where participants used Japanese taboo language in daily conversation. It could also be that students choosing to attend a Christian women's university are less likely to use profanity in general based on their personal background factors.

Similarly negative were perceptions of how they would be viewed when using English taboo language, with zero respondents answering "Agree" or "Strongly agree" on items about image (coolness and acceptance). This may stem from the

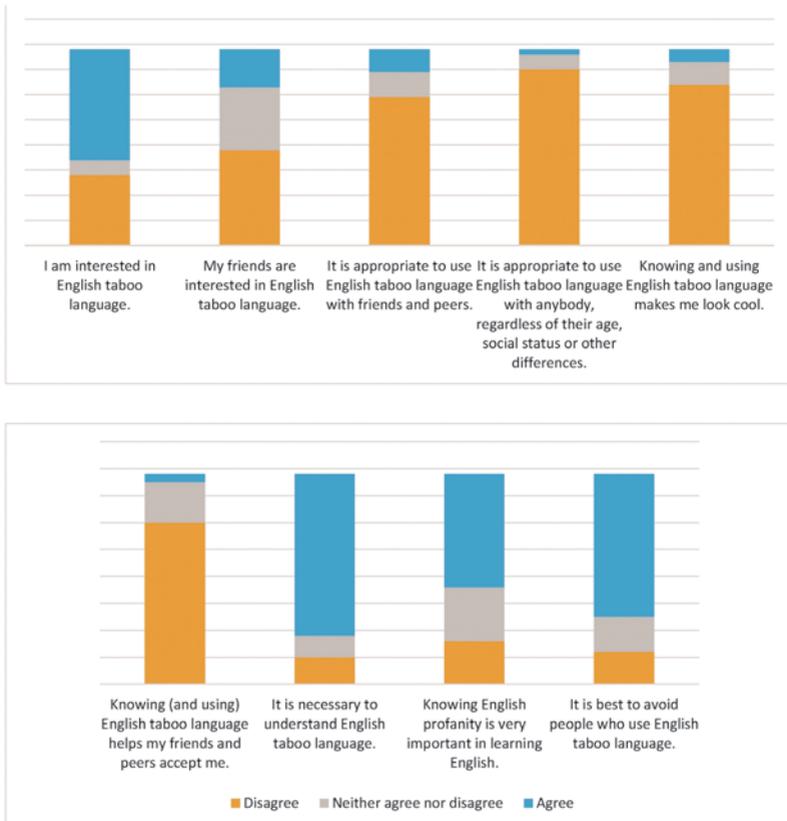


Chart 1. Attitudes on English taboo language

extra scrutiny that women receive when using profanity (Jacobi, 2014) or from a more general perception that using English taboo language is an antisocial behavior, to which the agreement on the final statement about avoiding users of such language may be reflecting. While students showed inhibitions against use with friends, the data showed that they still appreciated the difference between use with peers as opposed to use with anyone, regardless of social standing, as answers were more weighted towards stronger disagreement to the latter (mean 3.36,  $SD=1.520$  appropriate to use with peers; mean 1.86,  $SD=1.006$  appropriate to use with anyone). One interesting finding that goes against the generally negative attitudes found was that students still reported feeling that understanding English taboo language is necessary. A majority also felt that it is important in learning English, though there was slightly more disagreement and much more indecisiveness on that measure.

In total, these attitudes greatly reflect the ones shown in the blog article on “NG” (no-good) English language mentioned in the literature review (Weblio, 2016) which discusses the recommendation to learn taboo language for the sake of comprehension alone, to avoid using it with anyone, and to avoid users of it. This idea of only learning taboo language for comprehension alone may have caused the difference between the items on necessity of knowledge versus importance for language learning.

*Question Two:*

Using the same data, an Independent Samples t Test was performed comparing the means of those who reported having no abroad experience to those who reported having abroad experience, regardless of length of time abroad. Results found three items that were significantly affected. Cohen’s  $d$  was calculated by hand to find effect sizes for each of the mean differentials. One item was disre-

garded for having an effect size of  $d=0.01$ , leaving 2 affected items as seen in Table 1.

Table 1. Items significantly affected by experience abroad

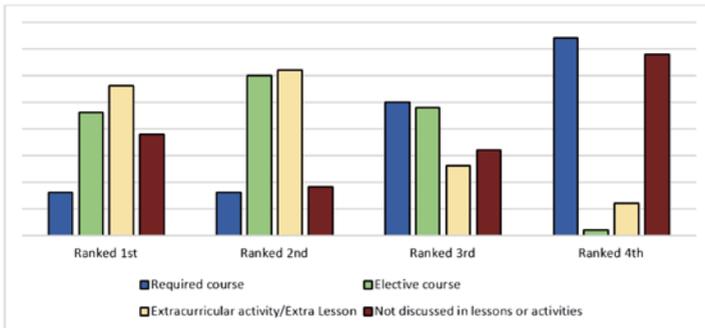
	Abroad Experience		No Experience		Significance	Effect Size
	Mean	SD	Mean	SD	p	d
It is appropriate to use English taboo language with friends and peers.	2.91	1.729	2.20	1.258	0.030	0.47
It is appropriate to use English taboo language with anybody, regardless of their age, social status or other differences.	2.13	1.338	1.67	0.790	0.004	0.42

Results showed that while both groups held negative attitudes regarding profanity, there was a medium positive effect on both items to do with appropriacy of English taboo language use, meaning that those with abroad experience felt that taboo language was slightly more appropriate to use with friends and others as compared to their peers with no experience abroad. Of those that had experience abroad, one left details of their experience unspecified. All others reported on the place, length of time, and reason for their stay. Half had been abroad for over one month cumulatively (N=11) and 8 of those had lived in an English-speaking country for at least three months, though one only during infancy. Therefore, it was surprising that the results showed significant differences with only a third in the abroad experiences group having lived abroad while most had only short experiences, often less than one week. It could be that those who lived abroad heavily affected the results, though it is difficult to know as there were too few to divide the group by experience length and perform further statistical analysis. It could also be that those who choose to travel abroad or with opportunities to travel abroad have a different relationship to English, specifically English outside of the

classroom, than those with no experience abroad. Perhaps those that travel abroad have had more contact with speakers that use informal English, or they consume more English media, much of which is likely to include taboo language.

*Question Three:*

The four options students were asked to rank stated that, in relation to MG, English profanity should (a) be discussed in a required English course, (b) be discussed in an elective English course, (c) be discussed in an optional extracurricular lesson or activity, or (d) not be discussed in lessons or extracurricular activities. The responses were analyzed for frequency by chosen rank, as seen on Chart 2. Two respondents wrote in the optional, open-ended portion.



Open-ended responses (translated from the original Japanese)

*Respondent 1: "Learn naturally through life. It is not something you need to know."*

*Respondent 2: "Only those who are interested can learn privately from movies, etc."*

Chart 2. Ranking frequency of options for discussion of taboo language

The frequency data shows that students generally preferred the idea of English taboo language being discussed in school over no discussion at all, though were heavily against it being included in a required course. The most commonly

high-ranked options were inclusion of English taboo language discussion in an elective English course or extracurricular activity/lesson. This matches with attitudes found from the previous section of the questionnaire. As many reported interest in taboo language and most felt it is necessary to understand, a desire for discussion on the subject while in school is seen as favorable. However, due to the nature of taboo language to cause discomfort and loss of face, students prefer that those who wish to avoid it have the possibility to do so to keep social peace.

Of the two respondents that answered the open-ended question, both ranked option (d) as their first choice, preferring no discussion of profanity, and used the space to state options for learning outside of school. Both had abroad experience, though only a single 5-day trip for each. Interestingly, for Respondent 1, despite the addition of stating that taboo language is not necessary to know, the same respondent answered with agreement (6) that it was necessary in the attitudinal survey. This could then be meant to reflect that it is not necessary to know for school, or it could be reflecting the conflicting nature people have on taboo language in general, even at the individual level.

## **Conclusion and implications for further research**

While there are many reasons to support the study of taboo language in the English language classroom, with its inherently risky and potentially threatening nature, we must first see if students are open to the idea of learning about it. This study has shown that indeed the majority of learners at Miyagi Gakuin Women's University are open to a discussion about profanity at school, and in fact generally welcome the idea as they feel it is necessary to know, despite having negative attitudes about taboo language in general. Implications of this research show that if the subject were to be discussed at MG, it would need to be done so with volun-

tary participants who joined a course or extracurricular event knowing that the subject of taboo language would be involved. Additionally, the topic would have to be discussed with caution as the learners overwhelmingly have negative attitudes towards the use such language. Care would need to be taken to ensure that students feel comfortable to explore the potentially socially negative, but also potentially socially positive, ideas and uses surrounding English taboo language.

Follow-up research for MG could go further into how students would like to see taboo language included in an optional course or elective activity. Additionally, more insight could be gained into attitudes by exploring views of students after they have studied abroad or by collecting opinions on Japanese taboo language attitudes to see if there is a correlation between negative attitudes across both languages. Comparing attitudes with more diverse populations, including that of teachers and administrators, could also be used to compare and contrast against the data found in the present study. Finally, beyond attitudinal studies, there are many areas of research on English taboo language that have yet to be done in either Japan or EFL contexts in general that would fill gaps in the current literature.

## **Limitations**

This study had several limiting factors. One, as mentioned above, was the order of questions in the third section of the survey, which while originally had been automatically randomized, due to a technical error became static, resulting in potential response bias. Another bias that could have resulted from the questionnaire was the explanation of profanity given. It was explained as words that cause strong emotion and are censored on TV, with the examples of *fuck* and *shit*. This choice was made to be easily understood rather than leave interpretation to the participant of the vague Japanese word *waruguchi* (literally translated as “bad

mouth”), which could also translate to insults, not just taboo words. However, the wording of the explanation may have left a more negative impression than the intended neutral explanation it was meant to serve as.

The context of where the questionnaire was given may have also influenced results. The questionnaire link was sent out in-class by the supervising teacher. Despite the lesson being online, students were still “in-class” when filling out their answers and may have felt more pressure to conform to the image of how a young educated woman attending a Christian women’s university should answer rather than how they actually felt, particularly on the items regarding the use of profanity with others when currently in a formal situation where profanity is unlikely to be welcome. Finally, results from this study are not generalizable. The purpose of the study was for a single university with a specific context to provide insight into students’ attitudes there and to find pedagogical implications for said university.

## References

- Allan, K., & Burrige, K. (2009). Swearing. In P. Peters, P. Collins, & A. Smith (Eds.), *Comparative Studies in Australian and New Zealand English* (pp. 359-384). Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Andang, K., & Bram, B. (2018). Swear words and their implications for English language learning-teaching. *LLT Journal: A Journal on Language and Language Teaching*, 21 (Suppl), 43-49.
- Ashwindren, S., Shankar, V., & Zarei, N. (2018). Selected Theories on the Use of Profanity. *International Journal of Academic Research in Business and Social Sciences*, 8 (9), 1975-1982.
- Beers Fägersten, K. (2012). *Who's swearing now?: the social aspects of conversational swearing*. Newcastle : Cambridge Scholars.

- Bergen, B. K. (2016). *What the F: What swearing reveals about our language, our brains, and ourselves*. New York: Basic Books.
- Bitch. (n.d.). In *Oxford English Dictionary*. Retrieved May 10, 2020, from <https://www.oed.com/view/Entry/19524?rskey=RANBBo&result=1&isAdvanced=false#eid>
- Blamire, E., Laternus, R., & Perez-Leon, A. (2013). Profanity across gender and age. *Sojourners: Undergraduate Journal of Sociology*, 5, 32-49.
- Bridget Jones's Diary (2001) *Parents Guide*. (n.d.). IMDb. Retrieved May 24, 2020, from [https://www.imdb.com/title/tt0243155/parentalguide?ref\\_=tt\\_stry\\_pg](https://www.imdb.com/title/tt0243155/parentalguide?ref_=tt_stry_pg)
- Brown, T. L., & Alderson, K. G. (2010). Sexual identity and heterosexual male students' usage of homosexual insults: An exploratory study. *Canadian Journal of Human Sexuality*, 19.
- Charkova, K. D. (2007). A language without borders: English slang and Bulgarian learners of English. *Language Learning*, 57 (3), 369-416.
- Cintas, J. D., & Remael, A. (2014). *Audiovisual translation, subtitling*. New York : Routledge.
- Cressman, D. L., Callister, M., Robinson, T., & Near, C. (2009). Swearing in the cinema: An analysis of profanity in US teen - oriented movies, 1980–2006. *Journal of Children and Media*, 3 (2), 117-135.
- Davies, M. (2008-) The Corpus of Contemporary American English (COCA): One billion million words, 1990-2019. Retrieved May 28, 2020 from <https://www.english-corpora.org/coca/>
- Dewaele, J. (2010). *Emotions in multiple languages*. Springer, 114-131.
- Dewaele, J. M. (2015). British 'Bollocks' versus American 'Jerk': Do native British English speakers swear more—or differently—compared to American En-

- glish speakers?. *Applied Linguistics Review*, 6 (3), 309-339.
- Dewaele, J. M. (2016). Thirty shades of offensiveness: L1 and L2 English users' understanding, perception and self-reported use of negative emotion-laden words. *Journal of Pragmatics*, 94, 112-127.
- Dewaele, J. M. (2017). Self-reported frequency of swearing in English: Do situational, psychological and sociobiographical variables have similar effects on first and foreign language users?. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 38 (4), 330-345.
- Finn, E. (2017). Swearing: The Good, the Bad & the Ugly. *ORTESOL Journal*, 34, 17-26.
- Furukawa, H. (2009). Bridget Jones's Femininity Constructed by Language: A comparison between the Japanese translation of Bridget Jones's Diary, and the Japanese Subtitles of the Film. In *Online Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association (PALA)*.
- Galinsky, A. D., Wang, C. S., Whitson, J. A., Anicich, E. M., Hugenberg, K., & Bodenhausen, G. V. (2013). The reappropriation of stigmatizing labels: The reciprocal relationship between power and self-labeling. *Psychological science*, 24 (10), 2020-2029.
- Haugh, M. (2007). Emic conceptualisations of (im) politeness and face in Japanese: Implications for the discursive negotiation of second language learner identities. *Journal of Pragmatics*, 39 (4), 657-680
- Hayati, A. (2010). The effect of speech rate on listening comprehension of EFL learners. *Creative Education*, 1 (02), 107.
- Holster, D. (2005). *An investigation of ESOL teachers' attitudes towards teaching about taboo English in the second language classroom* (Doctoral dissertation)

- tion, Auckland University of Technology).
- Horan, G. (2013). 'You taught me language; and my profit on't/Is, I know how to curse': cursing and swearing in foreign language learning. *Language and Intercultural Communication*, 13 (3), 283-297.
- Irwin, Grace. (2019). *Swearing in a Second Language*. Masters Theses. 930.  
<https://scholarworks.gvsu.edu/theses/930>
- Jacobi, L. L. (2014). Perceptions of Profanity: How Race, Gender, and Expletive Choice Affect Perceived Offensiveness. *North American Journal of Psychology*, 16 (2).
- Janschewitz, K. (2008). Taboo, emotionally valenced, and emotionally neutral word norms. *Behavior Research Methods*, 40 (4), 1065-1074.
- Jay, T. (2009). The utility and ubiquity of taboo words. *Perspectives on psychological science*, 4 (2), 153-161.
- Jay, T., & Janschewitz, K. (2008). The pragmatics of swearing. *Journal of Politeness Research*, 4 (2), 267-288.
- Kapoor, H. (2016). Swears in context: The difference between casual and abusive swearing. *Journal of psycholinguistic research*, 45 (2), 259-274.
- Kenny, T. (2017). *Easy F\*cking English*. Retrieved from <https://books.apple.com/jp/book/easy-f-cking-english/id1215163121?l=en>
- Liyanage, I., Walker, T., Bartlett, B., & Guo, X. (2015). Accommodating taboo language in English language teaching: Issues of appropriacy and authenticity. *Language, Culture and Curriculum*, 28 (2), 113-125.
- Mohr, M. (2013). *Holy Sh\* t: A brief history of swearing*. Oxford University Press.
- Nobata, C., Tetreault, J., Thomas, A., Mehdad, Y., & Chang, Y. (2016, April). Abusive language detection in online user content. In *Proceedings of the 25th*

- international conference on world wide web* (pp. 145-153).
- Ohkubo, Y. & Yatougo, T. (2005). An Examination of Resistance to "Abusive Language". *文教大学言語と文化 [Bunkyo University: Language and Culture]*, 17, 1-29.
- Peelle, J. E., McMillan, C., Moore, P., Grossman, M., & Wingfield, A. (2004). Dissociable patterns of brain activity during comprehension of rapid and syntactically complex speech: evidence from fMRI. *Brain and language*, 91 (3), 315-325.
- Thelwall, M. (2008). Fk yea I swear: cursing and gender in MySpace. *Corpora*, 3 (1), 83-107.
- Wang, W., Chen, L., Thirunarayan, K., & Sheth, A. P. (2014, February). Cursing in English on twitter. In *Proceedings of the 17th ACM conference on Computer supported cooperative work & social computing* (pp. 415-425).
- Weblio. (2016, August 18). <Weblio 英会話コラム>英語のNGワード、言っ  
てはいけない禁句の知識 [*<Weblio English Conversation Column> No-  
Good English Words, Knowledge of Prohibited Words that Should Not be  
Said*]. Retrieved April 23, 2020, from  
<https://eikaiwa.weblio.jp/column/knowledge/dirty-word>

2020 年度  
新任教員挨拶



## 新任のご挨拶

清水 菜穂

2020年4月より特命教員としてお世話になることになりました。宮城学院女子大学英文学科には1996年5月から2020年3月まで非常勤講師として授業を担当させていただきましたが、この度新たなポジションでまた仕事をさせていただけることになり、非常に嬉しく思っております。

専門はアメリカ文学およびアメリカ研究です。特にアフリカ系アメリカ文学と文化に関心があり、ここ数年は小説だけではなく、批評理論の研究および翻訳に取り組んでまいりました。現在、アフリカ系アメリカ人作家による戯曲にも研究の対象を広げているところです。この分野は日本ではあまり知られておらず、体系的な研究も少ないため、今後ゆっくり時間をかけて少しでも深く論じることができればと思っております。

宮城学院女子大学では、ご経験豊かで指導力抜群の先生方、常に親切で丁寧な説明をしてくださる事務の方々や図書館の方々、そして素直でときにお茶目な学生の皆さんに接することができ、非常に居心地の良い充実した時間を過ごせることを心から感謝しております。

美しい緑に囲まれたこのキャンパスで少しでもお役に立てるように、日々努めてまいる所存です。

皆様のご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶・自己紹介文

藤崎さなえ

2020年4月に着任致しました藤崎さなえです。私の1、2年生の担当科目は、英語を読む、書く、聞く、話す4 skillsの授業です。私の研究内容は、批判的思考とクリティカルリーディングです。一般の日本人にはまだあまり馴染みのない言葉ですが、批判的思考とは、「情報を疑い、鵜呑みにしない事、クリティカルに（複眼的に）物事を考える事」です。日本で「オレオレ詐欺」が広まってから既に16年も経つと言うのに、未だに被害件数/被害金額とも増加の一途を辿るという現実、多くの日本人に批判的思考が欠落している事を実感させられます。批判的思考は、学習により身に付けることができるスキルです。一般的に欧米の高校ではカリキュラムに含まれています。私の授業の中でも、特に読解授業と基礎セミナーの中で、このスキルを習得する事を授業目標の一つとしています。

現在の研究は、主に日本と英語圏両方の異なるメディアによって書かれた英字新聞記事を比較して、筆者の主張、記事の論調、その証拠となる表現に着目し、メディアリタラシーを含めた英語読解授業の開発、実践、評価に焦点を当てています。

話は変わりますが、私が尊敬して止まない日本女性の一人が緒方貞子さんです。緒方さんの国連難民高等弁務官としての経験を基に構築された、「仕事観」「リーダーの資質観」を読み解き、それをベースとしたグローバル人材に必要な学力の育成につながる授業も実践してまいります。国際社会で素晴らしい活躍をされた緒方さんについて深く学習する事が、学生のみなさんが卒業後日本、あるいは海外で仕事をする際に大いに役立つであろうと考えます。

緒方貞子さんの素晴らしい経歴とは比べものになりませんが、私も20

代に NY 州、30 代にはロンドンで留学して参りました。学士号は社会学を専攻し、大学院では英語教授法を学びました。二度の留学を通じ分かった事は、同じ英語圏ながら、アメリカ、イギリスの二つの国の文化の違いが、英語の表現方法に大きく影響していることです。かつ、二国間の社会構造の違いをも自分の目で見てきた経験が今の仕事に役立っています。イギリス留学後は、英会話スクールを立ち上げ、20 年間、幅広い年齢層の生徒さんに授業を行いながら、幼稚園と複数の大学で非常勤講師の仕事も兼任してきました。これらの経験を生かし、在任中は、学生のみなさんが情報について複眼的に考え、分析し、それに関する自分の意見を表現し、相手の意見を分析できる力の育成に貢献させていただきます。

## 入職のご挨拶

酒井 祐輔

2020 年度よりイギリス文学担当の教員として宮城学院女子大学に入職いたしました。酒井祐輔です。今年是我個人としても大きな変化があり、また世の中全体でも色々な動きがあったので、忘れられない1年になりそうです。4月は新しい環境で、しかも初めて経験する遠隔授業だったのでずいぶん戸惑うことが多かったように記憶しています。後期になって対面授業が始まってからも試行錯誤の連続ですが、英文科の先生方や副手さん、学生のみなさんのご協力もあって、なんとか年度の終わりがみえつつあります。

仙台に暮らしてこれで10年目くらいになるのですが、いままでは仙台駅の近くや、野草園の近所などに住んでいたもので、宮城学院の周辺はまだ未知の場所でした。キャンパス周辺は落ち着いた雰囲気ですね。私は歩いてキャンパスに来ることが多いのですが、周辺には草木が多いので季節の変化を身近に感じ取ることができ、これも素敵なことだなと思います。

歩いている間は研究のことを考えている、といえば格好いいのかもしれませんが、いつもそうしているわけではなく、半分くらいはイヤホンでオーディオ・ブックを聞きながら歩いています。きっかけは何年か前に古典落語の録音を聞くようになったことだったと思うのですが、途中から英語の本の朗読CDを聞けばいいと気づき、スマートホンに音声を直接ダウンロードできるサービスがあることを知ってからは、日常的に利用するようになりました。普段だったらあまり手に取らないようなビジネス書やベストセラーのノンフィクションなども、オーディオであれば気軽に聞けるので、読書の幅が広がって楽しいです。

研究をしていると普段の読書はどうしても文学の名作や文学研究の専門

書が中心になりますが、私が研究しているヴァージニア・ウルフという作家・エッセイストは晩年のエッセイで、様々なジャンルの本を新旧取り混ぜて読むことを推奨していました（“The Leaning Tower” 277）。「(いいものを)選ぶ際はまず(たくさん)サンプルを採ってみななければいけない(“We must sample before we can select.”)」というのが彼女の主張の根拠でしたが、これは身の回りに多様な文化が溢れるようになった現代にも役立つアドバイスのように思います。プライドや偏見に囚われずに様々な本を読んで行きたいです。

こちらに来て、最初は落ち着いた雰囲気 of 学生さんが多いのかなと思っていたのですが、一度やる気になるとどんどん自分で勉強を進めていくパワフルな人たちなのだということが段々と分かってきました。早くも来年度の授業について考える時期を迎えているのですが、そういう学生さんの期待に応えられる授業にしなければというプレッシャーを感じる反面、何ができるだろうかとわくわくしてもあります。どうぞよろしく願いいたします。

#### 参考文献

Woolf, Virginia. “The Leaning Tower.” *The Essays of Virginia Woolf*. edited by Stuart N. Clarke, vol. 6, The Hogarth Press, 2011, pp. 259-283.

# 2020年度 英文学科生の活動



## ESL (English Speaking Lounge)

### 目標に近づけるために

1年 築場 ゆい

客室乗務員になりたいという目標のもと、私は ESL を利用しています。日本にいながら英語で話すというアウトプットの際は貴重な機会だと思い、空いている日は必ず利用し、毎日の習慣の一部としています。

ESL では正しい文法で話すことよりも、相手に伝えることを優先させてためらわずに話そうと心がけています。最初は正しく話さないと恥ずかしいという気持ちが強く、最低限のことしか話すことができませんでした。しかし数を重ねるうちに間違った文法を使っても練習なのだからと気持ちを切り替え、失敗を恐れず自分の意見を言えるようになりました。どんどん失敗したほうが学ぶことが多いということに気づきました。ESL を終え



Steven 先生と ESL で話す築場さん（本人右）

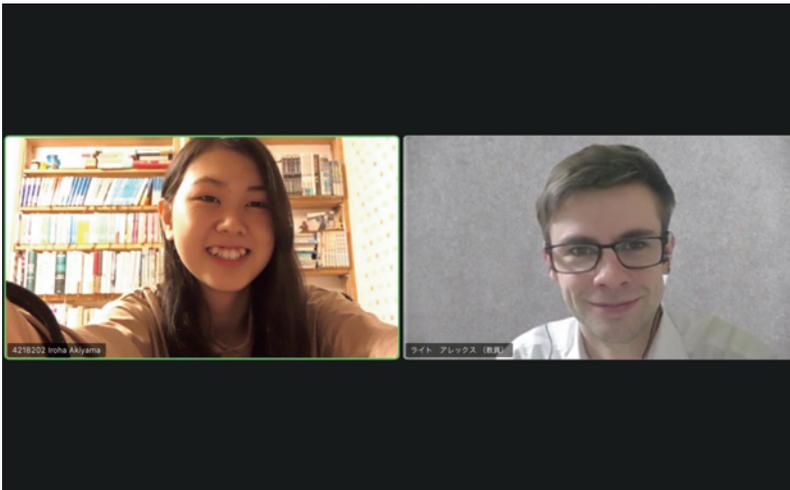
た後に反省をメモに取り、上手く伝えられなかった所は調べて復習もしています。

1日15分は短いと思っていましたが、毎日継続することで何十時間も会話をしていることに気づきました。将来の目標のために今後もESLを有効活用していきます。

## 4 技能向上計画

3年 秋山 彩葉

私は大学2年生後期より毎週ESLを行なっています。始めたきっかけは自分の英語力の低下を感じたからです。私は高校生の時にカナダへ留学をしていたこともあり、Alex先生と話が合い、始めた当時はカナダトークで盛り上がりました。



Alex先生とESLで話す秋山さん（本人左）

最近は日常会話はもちろん、レポートの添削までお願いしています。元々私は大の文法嫌いで、英語を話すにも感覚で話していました。そのため、伝えたいことがうまく伝えられないことが多々あり、ESL を続けていくと自分の文法について気になるようになりました。しかし、ESL の回数を重ねるごとに自分の伝えたいことが英単語に起こされ、繋がって文章になり、会話としてやりとりが出来るようになりました。これを繰り返し行うことによって自分の英語力が強化されていると感じます。

これからも自分の英語力をさらに強化できるよう、ESL を続けていきます。皆さんも ESL を通して英語の 4 技能をスキルアップしてみませんか。

## 海外長期留学報告

### イギリス留学を経て

3 年 安喰あゆみ

リーズ大学（イギリス）

(2019.10.7-2020.3.13)

私は 2019 年の後期、イギリスのリーズ大学に留学しました。イングランドの北部にあるヨークシャー地方に位置する大学です。英語力の向上、多様な文化を体験し、広い視野を持ちたいという思いから留学を決意しました。

私が受けていた授業は Speaking/Listening/Writing/Reading といった留学生向けの授業と、選択科目であった Local History と British Poetry です。10 人前後の小クラスで行われました。授業では Discussion が多く、環境・教育問題やイギリス文化、異文化交流など様々なトピックについて意見交換を行いました。最初は思うように自分の考えを伝えることができず苦労しましたが、友人や先生の英語の言い回しを吸収しながら次第にスムーズ

な会話を行えるようになりました。

生活面では、できるだけ長い時間、現地の英語や文化に触れたいという気持ちがあったためホームステイを希望しました。ホストファミリーは、日本ではまだあまり多くないベジタリアンで、とても新鮮な気持ちで充実した日々を送ることができました。動物を大切にしているからこそ、工夫して美味しい料理を作る姿やそれを決して他人に強制しない意志の強さを感じ、衝撃と感動を受けました。友人や隣人を招いてよくホームパーティーを開いてくれたため、大学内ではなかなか話せないであろう年代の方々とも交流できる機会もあり、イギリスらしい貴重な経験ができました。

今回の留学経験を通して、英語力向上だけでなく、内面的な部分も成長できました。主体的に物事に取り組み、英語の勉強や専攻としているイギリス文学の学びも深めつつ、就職に向けて準備を進めていきたいと思えます。



クリスマスのホームパーティーでのホストファミリーとの写真（本人右）

最後になりますが、感染症の影響で留学の予定が延期になった方やそう簡単に海外に行けなくなってしまった方もいらっしゃると思います。この状況下でも英文学科の皆さんが健康で充実した大学生活を送れますよう、願っています。

## 私のイギリス留学

3年 佐藤 有咲  
リーズ大学（イギリス）  
(2019.10.5-2020.3.29)

私は、約半年間イギリスのリーズ大学に留学しました。高校生のときに経験したロンドンへの短期留学をきっかけに、「大学では長期留学をしたい。もう一度イギリスへ行きたい。」という思いから本学と協定校であるリーズ大学への長期留学を決意しました。

大学では GE (General English) コースに所属し、基本的な英語の 4 技能を高めることを目的とした授業を受講しました。隔週で Progress Task があり、Presentation や Discussion、Vlog 作成や Essay などの課題に取り組みました。Vlog 撮影時には寮のイギリス人の友達にも出演してもらい、楽しく課題に取り組むことができました。写真はその時に撮ったものです。GE の授業を通して、自分の苦手分野が明確となり苦手意識の克服に繋がったと感じています。

さらに、私は GE の授業に加えて LinC と呼ばれる選択授業を履修しました。LinC では、Globalization と History of English を選択しました。LinC はよりアカデミックな内容なので授業のレベルが高く、特に Globalization の授業は理解に苦しみました。しかし、その分得るものも多く、語彙力や知識の獲得につながったと感じています。

私は本来 2020 年の 8 月まで留学をする予定でしたが、パンデミックの影響で早い帰国となりました。一月末にイギリス国内初の感染が確認されて以降、初めて経験するパンデミックへの恐怖を覚えるようになりました。3 月に入ると、ロンドンを中心に国内で感染者が爆発的に増加し、その結果イギリスはロックダウンとなりました。「マスク着用」という文化を持たないイギリス人が全員マスクと手袋で対策をしている異様な光景を目の当たりにし、パンデミックの恐ろしさを体感しました。そんな恐ろしい状況下においても、私は帰国という決断になかなかポジティブな気持ちにはなれず、沢山の葛藤や悔しい思いをしました。しかし、留学中に出会い同じような体験をした友達と連絡を取り合うことで、前向きな気持ちになることができました。

この留学を通して、英語力はもちろんですが、それ以上に価値のある「経験」と「学び」を得ることができました。またいつか、海外で挑戦できることを楽しみに、卒業までの大学生活を学びあるものにしたいです。



寮の友達と（本人右）

## 留学というターニングポイント

3年 佐藤 花歩

リーズ大学（イギリス）

（2019.10.7-2020.3.13）

「留学がしたい！」 宮城学院に入学する以前からこれを目標にしていました。2年生の10月から翌年の3月まで、イギリスにあるリーズ大学で5か月ほど語学留学をしました。私が留学をしたかった理由は2つあり、英語を話せるようになりたかったことと、将来に役立てられると思ったからです。

私はリーズ大学から徒歩15分ほどにある寮で生活しました。今までずっと実家暮らしだったので、一人暮らしのような体験をすることができました。シャワーは各部屋に設置されていたので、好きな時間に使うことができました。しかし、たまに冬にも関わらずお湯が出なくなってしまうことがあり、他の棟の空き部屋に行かなければならなかったのが大変でした。フラットメイトは他の大学から来た日本人や、中国と韓国から来た学生の計6人でした。キッチンが共同だったので、寮で生活している間も英語を使う機会を持つことができました。

受講した内容は Speaking がメインだったように感じます。渡航する以前から聞いていたように現地では自分の意見を伝えることが多く、ディスカッションやプレゼンテーションが評価に関わる課題になっていました。英語を話すために留学したのに、それが負担となつてうまくできない自分に焦りや情けなさを感じることも多くありました。そんな中、相談役の先生に悩みを打ち明けると、留学に来た頃よりも上手になっていると言ってもらったことで、もっと自信を持つてみよう和前向きに捉えられました。その助言のおかげで今の私は以前よりも自身を表現できるようになってき

ていると実感しています。

将来は教職に携わる仕事をしたいと考えています。そのために必要な勉強に取り組み、資格取得を目指しながら、自分の英語力も今よりもっと向上させることが目標です。リーズで学んだことを教育現場で最大限に活用できるよう励んでいきたいです。



大学内でプロジェクト中に先生との2ショット（本人左）

## 留学での学び

3年 佐藤 美歩

北アリゾナ大学（アメリカ）

（2019.8.26–2020.4.4）

私は2年生の8月から約7ヶ月間、アメリカの北アリゾナ大学に留学しました。英語を身近に感じられる環境で学びたいという思いと、異なる文化に興味を持っていたため、留学は入学前から目標の1つとして考えていました。

初めは語学学校からのスタートでしたが、次のセメスターから大学の授業に参加でき、英語だけでなく社会学、人類学の授業などを取りました。どの授業も意見を述べたり、グループワークで考えを共有したり、常に自分の意見を持つことが求められ、考えさせるような時間が多くありました。

また、寮生活は友人をつくったり、出会いの場を広げられる大切な場だと思いました。私は3人で住んでいたため、日常生活で共有するものやそれぞれの生活スタイルがあるため相手を配慮し、気持ちを尊重することは常に忘れないようにしました。北アリゾナ大学はイベントが豊富で設備も充実しています。ジムやプール、無料の映画館のような施設だけでなく、ホームカミングイベント、ハロウィンパーティーなど1年を通してアメリカの行事も楽しむことができます。そして様々な国の学生と関わることで毎日新しい発見があり、価値観を広げることができたり、友人との良い関係を築く中で刺激を得て自分自身を成長させるきっかけにもなったと思います。

私が留学を通して学んだことは、自分の行動力によって、得られる経験や可能性は大きく変えられるということです。留学をゴールと考えるのではなく、その後も目標を設定し、達成しようと努力することや、常に挑戦

する気持ちを持ち続けることは、今後社会で働いていく上でのキャリアアップに繋がると考えています。普段の生活とは全く異なる地で新しいことを始めるのは勇気もいりますが、新鮮で楽しく、本当に留学して良かったと心から思います。私はこの留学で得た経験を自信にして、これからも挑戦する気持ちを忘れずに、就職活動やキャリアデザインに繋げていきたいです。



友人とのラスベガス旅行（本人左）

## DA (Department Assistant)

### DA を通して

3年 青木 若菜

私は 2020 年度から約半年、デパートメントアシスタント (DA) として活動してきました。DA をやってみようと思ったのは、空き時間を使って仕事ができると知ったからです。空き時間を有効活用できるのではないかと思います、挑戦することにしました。初めはどんな仕事をするのかと緊張していましたが、難しい仕事は一つもなく、安心したことを覚えています。

主な仕事内容は、授業名簿作成、授業資料作成、Microsoft Teams への入力作業でした。今年度の前期はコロナウイルスの影響により、授業も DA の仕事もすべてオンラインで、パソコンでの作業でした。後期になってからは、パソコンでの作業に加え、大学に行って作業することもありました。大学での仕事内容は、英文学科主催イベントでの配布物作成で、単



パソコンで作業をする青木さん

純作業が好きな私にとってはとても楽しいお仕事でした。

今年度は例年より仕事が少ないと伺いましたが、当初私が考えていたように、空き時間を有効活用することができました。パソコンを使用した仕事が多く、パソコン操作能力が上がったこと、特にタイピングのスピードが速くなったことを実感しています。また、作業効率を上げるにはどうすればよいか考えるようになるなど、とても自分のためになったと感じています。

1、2年生の皆さんで DA に興味がある方、空き時間を有効活用したいという方、DA にはいくつか条件がありますが、間違いなく良い経験になるのでぜひ挑戦してみてください。

## DA を経験して

4年 松田亜利紗

2019年3月から現在まで、デパートメントアシスタント（DA）として大学の空き時間に英文学科運営のお手伝いをしています。内容は主に講義で使う配布資料の印刷や研究室への郵便物配達、学生の English Speaking Lounge の利用・出席回数の集計などです。学生向けガイダンスの準備やオープンキャンパスでの学科の展示ブースの設営も経験しました。

私が初の DA だったため前例がなく、教授からお話をいただいた時は、「自分にできるのだろうか」と非常に不安でしたが、学生として学科のお手伝いができることは滅多にない貴重な経験になるだろうと思い、DA のお仕事をお受けしました。

パソコンを使ったデータの打ち込みや表の作成など、DA のお仕事は私が想像していた以上に楽しくやりがいのあるものでした。また、お手伝いを通して、「いつまでに何をどうすればいいのか」という一つ一つの作業

の時間配分がうまくできるようになりました。

これから DA に参加しようと考えている方、興味を持った方は、普通のアルバイトではできない良い経験ができるのでぜひ挑戦してみてください。



学科イベントで資料を配布をする松田さん

# 2020年度 英文学科活動報告



## 2020 年教員研究・教育活動報告

遊佐典昭

### 研究活動

コロナ禍の影響で、本年度は講義の準備に多くの時間を要したために、研究の生産性があがらない一年であったが、可能な範囲で研究課題「文法性の錯覚から見た第二言語処理の解明と、その英語教育への応用」（科研基盤（B））を中心に研究を行った。研究成果は、研究書の一部としてまとめ発表した。また、昨年度、日本言語学会誌に共著として発表した論文“Two Routes to the Mayan VOS: From the View of Kaqchikel”が論文賞を受賞した（共著論文であるが、日本言語学会の規程で、論文賞は若手研者に贈られるので、実際は第一著者の大滝宏一氏が論文賞を受賞した）。

### 論文

1. Yusa Noriaki (in press) “Review of *An Invitation to Second Language Acquisition Research: From Theory to Experiment*,” *Journal of Japanese Linguistics* 37.1.
2. Yoshimura, N. Nakayama, M. Fujimori, A. & Yusa, N. (in press) “Is a gender distinction helpful for Japanese EFL learners in comprehending raising constructions,” In Isabelli, C-A, Leal, T. & Shimanskaya, E. (eds.) *Generative SLA in the Age of Minimalism: Features, Interfaces, and Beyond, Selected Proceedings of the 15th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference*. John Benjamins Publishing.
3. Otaki Koichi, Sato Manami, Ono Hajime, Sugisaki Koji, Yusa Noriaki, Kaitapu Soana, Veikune Ana Heti, Vea Peseti, Otsuka Yuko, and Koizumi Masatoshi (2020) “The Ergative Subject Preference in the Acquisition of Wh-questions in Tongan,” *BUCLD 44: Proceedings of the 44th annual Boston University Conference on Language Development*, 465-478. Cascadilla Press.
4. 遊佐典昭・大滝宏一（2020）「Be 動詞の過剰生成と時制の獲得」白畑知彦・須田孝司（編）『第二言語習得研究モノグラフシリーズ 4：第二言語習得研究の波及効果 コアグラマーから発話まで』くろしお出版。1-29.

## 社会活動

1. 日本英語学会理事、評議委員
2. 日本第二習得学会顧問
3. 言語科学学会企画委員
4. 海外ジャーナル・学会査読委員

## 科学研究費の受領

1. 「文法性の錯覚から見た第二言語処理の解明と、その英語教育への応用」(基盤研究 (B)、代表)
2. 「OS 言語からみた「言語の語順」と「思考の順序」に関するフィールド認知脳科学的研究」(基盤研究 (S)、分担)
3. 「動詞先行型危機言語と日英語から見る身体運動・言語・認知の関係とその普遍性」(基盤研究 (B)、分担)

## 教育活動

今年も、英文学科の『ことばと人間』『英語音声学』『Academic Reading』『英語学基礎セミナー』『生成文法』『卒業研究セミナー』、および他学科の『基礎演習』を担当した。コロナ禍での遠隔授業であったが、グループワークを多く取り入れ受講生が対面式にできるだけ近い環境で学習ができるように務めた。ただし、同期型遠隔授業でも対面授業とは異なる点が明らかになったので、来年度の講義運営に活用したいと思う。

増富和浩

## 研究活動

従来取り組んできた英語名詞句内部の統語構造の研究においては、名詞句の主要部である名詞と冠詞や指示代名詞等の限定詞句との関係に焦点を当てて、名詞句内部での構造構築の過程や移動などの統語操作が生じる原因について考察を行ってきた。これに加え、昨年度後半より研究上の視野を広げ、主要部の名詞とその修飾要素である形容詞等との関係を射程に入れて研究を行っている。名詞句における形容詞と主要部名詞との語順は、形容詞が名詞に先行する前置修飾が基本とされるが、something などの不定代名詞は形容詞による後置修飾を受けることが知られている。今年度は、このような名詞と形容詞の修飾関係における語順に関する事実注目し、

形態統語論的な観点から考察を行った。その成果は、本学研究所の紀要にて発表した。

また、数年前から、本学での研究で得られた成果を英語教育の現場にどのように還元できるかを検討し始めており、今年度の研究成果もそのような方向性の中で整理し将来的に書籍等にまとめることを計画している。一方で、今年度の研究活動は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたことも事実である。基本的には研究活動も遠隔・オンラインに限定されたことにより、活動内容も制限されたが来年度につながる知見をいくらか得ることができた。

## 論文

増富和浩「英語の複合不定代名詞 something を含む名詞句における形容詞の生起位置に関する形態統語論的研究」『人文社会科学論叢』第 30 号、宮城学院女子大学人文社会科学研究所、2021 年 3 月。

## 社会活動

今年度は、教育資源開放委員会（教務部）の座長として、宮城学院高等学校との高大連携授業を運営したほか、宮城県泉高等学校での『総合的な学習の時間』への協力企画の運営を行った。特に、泉高等学校との協力企画を開始できたことは、本学における高大接続教育の推進に関して新たな取り組みとなった。

## 教育活動

新型コロナウイルス感染拡大対策として、今年度の前期はすべての授業を遠隔で行い、後期は対面授業と遠隔授業が混在する状況での授業運営となった。本学において、本格的な遠隔授業の実施は初めての経験となるため、様々なトラブルの発生が予想されたが、英文学科の教務センター委員として、学生および教員間の連絡等の窓口となり、概ね支障なく英文学科全体の授業運営を行うことができた。

また、私自身が担当する 1、2 年生対象の文法関連科目、および 3、4 年生対象の「英語学基礎セミナー I・II」、「卒業研究セミナー I・II」等のゼミ科目に関しても、ほぼ例年おりの学習成果を達成できたと考えている。

## John Wiltshier

### 研究活動

This year I have been busy as an educational consultant on a new English language learning textbook series. The series is called *Connections* and will be published in March 2021 by Pearson, Canada. The series is a task-based course which integrates the 4 skills; reading writing speaking listening and includes project work in each unit. The series will be used by teachers in North America, South America and the Middle East.

In addition, I have helped in the development of e-books (digital versions of the paper books) for the English Firsthand series.

### 研究発表

Wiltshier, J.M. (2020, February). "Effective speaking classes". Showa Women's University, Tokyo.

Wiltshier, J.M., & Helgesen, M. (2020, November). "Teaching online and after: what we'll keep". JALT International Conference, (online).

### 教育活動

Due to COVID19 this year has been a very difficult year to maintain any resemblance of normal university life. Ensuring high educational standards were maintained was very important and this was done through using Microsoft TEAMS (online site) to run classes such as British Life and Culture, as well as becoming familiar with using Zoom to run all the Speaking classes live online. The Listening class was moved to a 'time-free' style from the 2nd semester with all students in the 1st year completing the same course with weekly support via TEAMS if needed.

The Pearson Progress test was not administered this year as planned due to administration difficulties caused by COVID19. However, the TOEIC test was held online both in June and November. The scores for students were higher than previous years. The English Speaking Lounge (ESL) in the department was moved online and has run smoothly. Probably this will remain online even after COVID19 as this allows students and the teachers to join from home.

'Online study abroad' has been offered at Hawaii University for students who

had their study abroad cut short or who were unable to go this year. This programme is a three-week program to be held twice; once in February and once in March.

British Hills for the 1<sup>st</sup> years had to be cancelled because of COVID19 but a dinner and dining etiquette lecture at the Royal Park Hotel in Izumi, Sendai, is planned for January as a replacement.

## 酒井祐輔

### 研究活動

今年は Virginia Woolf の作品 *To the Lighthouse* (1927) を 19 世紀末から 20 世紀はじめにかけての英米におけるリベラリズムの言説との関連というコンテキストのもとで論じるプロジェクトに取り組んだ。この成果については来年度早々に活字化する予定である。また、ウルフの夫 Leonard について新しく出版された伝記の書評を担当した。次年度はウルフの 30 年代から晩年にかけての著作を中心に研究し、成果発表に努めたい。

### 書評その他

書評：酒井祐輔「Fred Leventhal and Peter Stansky, *Leonard Woolf: Bloomsbury Socialist* (Oxford UP, 2019)」『ヴァージニア・ウルフ研究』第 37 号、日本ヴァージニア・ウルフ協会、2020 年 12 月。

随筆：酒井祐輔「転居と遠隔」(小特集：2020 年「から」考える—研究/教育の過去・現在・未来)『ヴァージニア・ウルフ研究』第 37 号、日本ヴァージニア・ウルフ協会、2020 年 12 月。

### 研究発表

酒井祐輔「*To the Lighthouse* における単純さと複雑さ——Woolf とコミュニティ再考」日本英文学会 92 回大会、ウェブ学会、2020 年 7 月。

### 社会活動

今年度は日本英文学会の全国大会に続いて東北支部 75 回大会もウェブ形式での実施となった。東北支部の事務局員として大会特設ページおよび質疑応答用フォームの作成とその管理運営に当たった。

## 教育活動

前期はオンライン授業となったため、学生に過度の負荷をかけないよう配慮しつつ、動画配信とコメント提出を軸とした授業を展開した。対面授業と比較してやりづらい面も多々あったものの、LMS を使用することで、学生の素朴な質問を集めることができるなど、新しい学びも多かった。2 年生向けの「英米文学講読（詩・演劇）」ではグループ・プレゼンテーションとディスカッション、レクチャーを交えた形式の授業を実施した。比較的人数の多いクラスだったため、後期になって対面授業を実施するようになってからも LMS を併用し、学生の素朴な質問にも答えるようにすることで、学生がやりがいを感じられるよう配慮した。また詩のなかで使われている単語について英英辞典を調べて、なぜその単語が使われたのかを考察するといった課題を出すなど、文学や文化に関心のある学生と英語学に関心のある学生のどちらもが取り組みやすい授業となるように心掛けた。3・4 年生向けの研究セミナーでは前期は C.S. Lewis の *The Chronicles of Narnia*、後期は Oscar Wilde の短編を読む授業を実施した。内容の濃密さも考慮すると決して簡単なテキストではなかったため、同伴してくれた受講者には深く感謝したい。3 年生向けの基礎セミナーでは同僚の田島先生、Bruce 先生と連携しながら英文レポートの執筆支援を行った。4 年生向けの卒業研究セミナーでは論文執筆法についての一般論と並行し、個々の学生のニーズに合わせてアドバイスを行っていった。基礎セミナーや卒業研究セミナーにおける執筆支援のアドバイスにおいては、優れた点を指摘し、学生が自分のアイデアに自信を持って執筆できるような環境作りを心掛けた。

吉村典子

## 研究活動

「リチャード・ハミルトン研究」について、2020 年度はコロナ禍によりイギリスとドイツでの調査を断念したが、過年度までの調査をもとに論文執筆に努め、学会に投稿した。投稿論文はすべて採択され、国際学会（クロアチア開催→オンラインに変更）での口頭発表や論文出版に至った。近年進めている「ジョン・マクヘイル研究」においては、イェール大学より賞が与えられ、同大学英国美術センターでの研究ポストを得た（2021 年 10 月 -12 月）。

## 学術論文

吉村典子「リチャード・ハミルトンの《Lux 50 – functioning prototype》」『美学』第 71 巻 1 号、2020 年 6 月。

Noriko Yoshimura, “Richard Hamilton and LUX 50th Anniversary Project,” *LESSONS TO LEARN? Past Design Experiences and Contemporary Design Practices*, Institute for the Research of the Avant-garde, October 2020.

吉村典子「塩見允枝子《空間的な詩》とリチャード・ハミルトン」『英文学会誌』第 49 号、宮城学院女子大学学芸学部英文学科、2021 年 3 月。

## 口頭発表

Noriko Yoshimura, “Richard Hamilton and LUX 50th Anniversary Project,” The 12th Conference in the International Committee for Design History and Design Studies, Zagreb, 16 Oct, 2020 (on-line).

吉村典子「戦後英国美術におけるモリス解釈」意匠学会デザイン史分科会 / 第 5 回モリス研究会、2020 年 12 月（オンライン）。

## 科学研究費の受領

基盤研究 (C) 代表

「リチャード・ハミルトン研究 ―ニューカッスル時代を中心に―」

## 社会活動

意匠学会編集委員

意匠学会『デザイン理論』投稿論文・査読

美学会『美学』投稿論文・査読

第 5 回ウィリアムモリス研究会（オンライン）運営・実行

## 教育活動

学内では、本誌巻末の「講義題目」の科目を担当した。前期はすべて「遠隔」授業となり、複数の Web 会議システムの導入を試み、非常勤講師の先生方と手法を共有した。後期は、時間帯により「対面」授業が実施できるようになり、可能な限り対面スタイルとした。

本年度コロナ禍で、中止せざるを得なかった学生たちの活動の機会につ

いては、別の方法をもって教育の充実化を試みた。Web 会議システム上に、「留学フォーラム」や「英文学科」など複数のプラットフォームを設置した。卒業生や外部講師によるオンライン講座の開催や、対面の演奏会等のイベント企画・実行に取り組んだ。実施にあたっては、英文学科教職員各位と DA（本誌 pp.84～86 参照）に尽力いただいた。この場をかりて感謝の意を表したい。

## 田島優子

### 研究活動

米国での海外研修から戻った今年度は、研修中にリサーチした内容や資料収集できた文献を利用しながら、ナサニエル・ホーソーン作品における女性表象に着目して、引き続き論文の執筆を進めた。新型コロナウイルスの影響で、学会での口頭発表を行うことができなかったことが残念であった。また、こちらも未投稿であるが、カート・ヴォネガットの作品をアメリカ小説ロマンス論の観点から分析し、論文にまとめた。後者の内容を今後発展させて数年後にアメリカ文学会全国大会のシンポジウムで発表する計画等もあり、そのためにポストモダン期を専門とする研究者らと新しく交流を持たせたことは有益であった。

### エッセイ その他

1. コラム：田島優子、WITH Ms. サタデーコラム第 78 回「ヒロインたちの強さと想像力」『河北新報』、2020 年 12 月 5 日、朝刊、12 面
2. 報告：田島優子、「マサチューセッツ州ノーサンプトンでの在外研究を終えて」『東北アメリカ文学研究』第 44 号、東北アメリカ文学会、2021 年 3 月（印刷中）

### 社会活動

1. 日本ナサニエル・ホーソーン協会役員
2. 日本アメリカ文学会東北支部役員

### 教育活動

今年度の「英米文学・文化基礎セミナー」では、19～20 世紀の主要なアメリカ文学の作家（Kate Chopin, F. Scott Fitzgerald, Truman Capote など）

によって執筆された短編小説を取り上げた。精読を通してそれぞれの作品を深く味わうようにしたことに加え、学生同士でグループ・ディスカッションによる作品の考察をしてもらい、テキストで述べられている内容を根拠として示しながら論理的に説明／発表してもらおうという取り組みを重点的に行った。前期は双方向ウェブ会議システムを利用した遠隔授業で実施したため、例年に比べると受講者との意思疎通が難しい面もあったが、今年度は授業課題やレポートを毎回課して提出を求めた結果、口頭で発表させただけの時よりも詳細なフィードバックができたことは利点であった。後期は対面で、英文レポートの構成についての説明や添削に力を入れた。「英米文学の世界（19～21世紀）」では Ernest Hemingway の短編小説を精読した。こちらは前期は同期型ウェブ会議、後期は非同期型のビデオ視聴の形で授業を行なった。今回工夫したのは、これまでのように授業後にミニレポートを提出させるのではなく、予習の時点で提出してもらうように変更したことだったが、受講者が例年以上にテキストをしっかりと精読して授業に参加してくれたように思う。レポートは毎回点数をつけて返却し、次の授業で紹介、フィードバックするようにした。

## 清水菜穂

### 研究活動

ここ数年、アフリカ系アメリカ文学の批評理論研究および理論書の翻訳に努めてきたが、2020年初頭よりアフリカ系アメリカ人作家の戯曲研究に取り組んでいる。具体的には James Baldwin の戯曲 *Blues for Mister Charlie* に関する論考を11月に刊行した（共著）。続いて日本では論じられることの少ない Adrienne Kennedy の一幕劇 *The Ohio State Murders* に関する論文を2021年3月に発表した。

### 論文

清水菜穂「ジミーよ、今生きていたら何を思う？——ジェイムズ・ボールドウィンの『白人へのブルース』『ブラック・ライブズ・スタディーズ—BLM運動を知る15のクリティカル・エッセイ』（山本伸・西垣内磨留美・馬場聡編著）三月社、2020年11月

——「Adrienne Kennedy の *The Ohio State Murders* における殺人者」『英文学会誌』第49号、宮城学院女子大学芸学部英文学会、2021年3月

## 社会活動

多民族研究学会（MESA）大会運営委員長

## 教育活動

新型コロナウイルス感染の状況下、前期は「アメリカ文学史Ⅰ」「アメリカ文化史Ⅰ」「英米文学・文化研究セミナーⅠ」のすべてをリアル・タイムでのオンライン授業を行い、後期は「アメリカ文学史Ⅱ」をオン・デマンド型のオンラインで、「アメリカ文化史Ⅱ」「Intensive Reading 2 (a)」「英米文学・文化研究セミナーⅡ」を対面で行った。

前期のリアル・タイムでのオンライン授業では、パワーポイントのスライドを用いながらの講義、受講者との質疑応答、受講者によるプレゼンテーションをすべて Teams で行い、課題提出は Teams と Unipa を利用した。Teams を扱うこちらのスキル不足にもかかわらず、受講者が積極的に授業に参加したおかげで、無事に最終回まで進むことができた。特に「研究セミナー」でのプレゼンテーションでは、当初オンラインでうまくいくかどうか心配したが、予想以上に全員見事に発表でき、質疑応答も活発となり、この点は担当教員として嬉しい限りであった。

後期の「アメリカ文学史Ⅱ」の動画配信は、大学による研修会が非常に参考になった。毎回 300 ～ 500 字程度の文章を提出課題としたが、受講者の文章力が目に見えるほど向上したように思われる。また、「Intensive Reading 2 (a)」の授業では、多くの受講者が大意はつかめるものの精読に必要な基本的文法事項の理解ができていないことがわかり、そうした説明に力を入れた。

前期・後期を通して「アメリカ文学史Ⅰ・Ⅱ」「アメリカ文化史Ⅰ・Ⅱ」「英米文学・文化研究セミナーⅠ・Ⅱ」では、アメリカ文化やアメリカ文学の根底に流れるアメリカ独特の思想や価値観を受講者が理解することを目標に授業を行った。どの授業においても受講者が熱心に学習に取り組んだため、教える側が教えられることも多かった。

今後はオンライン授業のスキルをさらに身に付け、効果的な授業展開を心がけるつもりである。

## 藤崎さなえ

### 研究活動

大学生の Critical Reading skills (CRS) を育むために、英語読解授業の中で英字新聞記事を活用し、記事に書かれた社会的背景の読み取り能力を向上させるための授業の開発、実践とその評価を行った。筆者の主張や論旨の証拠（英文読解における「背景となる知識」）が明らかとなっている傾向の強い英字新聞の社会面を通じて、どのように学生が筆者の主張を分析し、証拠を評価し、各メディアの政治的思想を理解しながら、各記事の主張の背景を探り CRS を身に付けて行くのか、というプロセスについて明らかにする。また、事前事後の読解テストを行い、どの程度学生の CRS が身に付いたのかを評価する。

CRS を伸ばす為に英語読解授業で研究を行う理由は、日本語新聞記事を使用しての読解授業よりも、異なるメディア、特に英語圏のメディアと日本のメディアの記事を比較読解する方が、同じトピックで書かれた記事でも、筆者の主張の違いと意図がより明確に現れる為である。

授業の中で、積極的にペアワーク・グループワークによる協力し合う学習を取り入れ、読解についてのディスカッションを促し、課題の解決と文脈解釈の探求をも促進させていく。この協調学習によって、国際団体 ATC21S (Assessment and Teaching of 21<sup>st</sup> Century Skills) の定義するグローバル学力の要素である、批判的思考・問題解決・意思決定・情報リテラシー・コミュニケーション・チームワーク・文化の認識や需要を含む個人と社会の責任を伸ばす事も可能となると考える。

### 論文

Sanae Fujisaki. "Nurturing Learners' Critical Reading Awareness and Attitude: Designing, Implementing and Evaluating English Classes at Universities" 東北大学大学院教育学研究科『研究年報第 68 集第 2 号』 p25-46.

### 学会発表

第 69 回全国社会科教育学会 10 月 24 日-12 月 25 日 (オンライン開催)「クリティカルリーディングスキルを育成するための大学英語授業の開発・実践とその評価」

## 社会活動

Japan Association of Language Teaching Sendai (JALT) Facility 担当

12月5日 Open Campus 担当。Zoom Video 作成 “What Is Critical Reading?”

## 教育活動

ESL を担当し、これまでの対面方式から、新型コロナウイルスに対応する為 Online ESL への切り替えを準備、運営のセットアップをした。1、2 年生対象クラスは Four skills (speaking, listening, writing, reading) 授業を担当した。3 年生の『Academic Reading』ではクリティカルな読みができるようになるために、まず fact/opinion の見極め方を学習した。その後、異なるメディアによって書かれた、同じトピックに関する英字新聞の比較読解を行った。トピックは、新型コロナウイルスの PCR 検査の件数に関する日本政府の対応に関したもので、4つのメディア（日本の大手新聞社 2 つ、イギリス BBC、アメリカ The New York Times）の主張、論調を読み解いた。グループワークを通じて、critical reading work sheet のチェック項目の答えを学生達が解いた。始めは教員のサポートなしではメディアの違いによる各記事の主張、論調の違いに気付かなかった。しかしその後、Media Literacy について学習し、学生たちが自ら比較読解したいトピック、それに関連した記事を選び、自分たちの力だけで、異なるメディアの主張の違い、論調の違いを概ね理解できるようになった。『基礎セミナー』では、Khan Academy のサイトを活用し批判的思考とは何か、そしてそれがなぜ我々に必要かを学んだ。緒方貞子さんの偉業を扱った BBC と The Asahi Shimbun の 2 つの記事を比較し、そこから浮かび上がった、緒方さんの仕事の取り組み方と、緒方さんが日本社会へ提言された事（リーダー育成教育の欠如、原発技術の輸出反対、難民の受入数増加、留学の勧め）について討論した。また、アメリカ初の女性副大統領となる Harris 氏の受諾スピーチを聞き、読み、アメリカ社会の問題、コロナと温暖化問題の Science に関する取り組みについて討論した。かつ、この Harris 氏のメッセージが、日本の民主主義と、日本女性の社会的地位の向上にどのような意味を与えるのかを学生たちに考えてもらい、発表してもらった。年間を通じて、情報を critical に分析し、考え、自分の意見をまとめて発表できる力を育成する事をゴールとした。

## 2020 年度開講 英文学科講義題目

### 英文学科専任教員

#### 遊佐典昭

ことばと人間  
英語音声学  
生成文法 (2 年生)  
Academic Reading  
英語学基礎セミナー  
卒業研究セミナー

#### 増富和浩

Grammar (1 年生)  
Grammar (2 年生)  
生成文法 (3 年生)  
英語学基礎セミナー  
卒業研究セミナー

#### John Wiltshier

Speaking (1 年生)  
Speaking (2 年生)  
Listening & Vocabulary (1 年生)  
イギリスの生活と文化  
英語教育 (TESOL)  
英語学基礎セミナー  
卒業研究セミナー

#### 酒井祐輔

Intensive Reading (1 年生)  
英米文学講読 (詩・演劇)  
英米文学・文化基礎セミナー  
英米文学・文化研究セミナー

#### 卒業研究セミナー

#### 吉村典子

イギリスの生活と文化  
イギリス文化史  
Academic Reading  
英米文学・文化基礎セミナー  
卒業研究セミナー

#### 田島優子

Intensive Reading (2 年生)  
英米文学の世界 (19 - 21 世紀)  
英米文学・文化基礎セミナー  
卒業研究セミナー

#### 清水菜穂

Intensive Reading (1 年生)  
アメリカ文化史  
アメリカ文学史  
英米文学・文化研究セミナー

#### 藤崎さなえ

Reading Activity (1 年生)  
Speaking (1 年生)  
Writing (1 年生)  
Intensive Reading (2 年生)  
Listening & Vocabulary (2 年生)  
Academic Reading  
Academic Writing & Presentation  
英米文学・文化基礎セミナー

非常勤教員

王 軒

外国語としての日本語

岡田 毅

コーパス言語学

金子義明

Grammar (2 年生)

英語学研究セミナー

菅野幸子

文化交流論

菅野雅代

Listening & Vocabulary (2 年生)

木村春美

英語学研究セミナー

木山幸子

語用論

心理言語学

久保田佳克

Writing (1 年生)

Intensive Reading (2 年生)

熊谷優克

英米文学・文化研究セミナー

小泉政利

日英語対照研究

心理言語学

越川芳明

英米マスメディア論

佐藤智子

Intensive Reading (1 年生)

佐藤 恵

英米文学講読 (小説・批評)

島 越郎

Grammar (1 年生)

Grammar (2 年生)

杉山 恵

Writing (1 年生)

鈴木美津子

英米文学の世界 (15-18 世紀)

Academic Reading

イギリス文学史

英米文学・文化研究セミナー

鈴木 涉

英語科教育法 (2 年生)

高橋久子

Intensive Reading (1 年生)

那須川訓也

英語学研究セミナー

社会言語学

野村忠央

英語の歴史

**福地和則**

教職実践演習 (中・高)  
英語教材研究  
英語科教育法 (3 年生)

**Cory Koby**

Reading Activity (1 年生)  
Speaking (2 年生)  
文化研究 (オーストラリア・カナダ)

**Robert Green**

アメリカの生活と文化  
Writing (2 年生)

**Barry Kavanagh**

Speaking (1 年生)  
Speaking (2 年生)

**Bruce Leigh**

Academic Writing & Presentation

**Jerry Miller**

Speaking (1 年生)

**Tomomi O'Flaherty**

Writing (2 年生)

**Anne Thomas**

Academic Writing & Presentation  
Discussion Seminar

**Alex Wright**

Speaking (2 年生)  
Writing (2 年生)  
Reading Activity (2 年生)

**Patrick Conaway**

Academic Writing & Presentation  
Writing (2 年生)

**Darren Kinsman**

Listening & Vocabulary (1 年生)  
Speaking (2 年生)  
Writing (2 年生)

**Diego Dardon**

Writing (1 年生)  
Discussion Seminar

## 2020 年度 英語英米文学専攻講義題目

### 🦋 英文学科専任教員 🦋

吉村典子

英米文化論特殊講義（文化論）

田島優子

修士論文演習

### 🦋 非常勤教員 🦋

佐藤智子

英米文学特殊講義（小説）

**Bruce Leigh**

英語コミュニケーション

## 2020 年度 卒業論文題目

### ★ 遊佐ゼミ (英語学)

- 阿部 恵 …… 私たちは「笑う」をどう表現しているのか? —オノマト  
ペの起源に着目した日英語比較分析
- 阿部 礼奈 …… 複合語における和製英語 —英語が及ぼす影響について—
- 大沼 晏佳 …… 日本語の料理名にみられる前置詞の考察 —with の使用  
頻度が低い要因について—
- 小野舞理彩 …… 経験者目的語タイプの心理動詞の習得が難しい要因
- 熊谷麻里菜 …… 日英比較で見る前置詞 about の表現
- 熊谷里佳子 …… 英語イントネーションの習得 —日本人英語学習者にお  
ける母語からの干渉—
- 黒須 菜緒 …… The Use of Articles on Head Nouns in Relative Clauses
- 郡山 美洸 …… Articles in *There*-Constructions and Effects of Heavy NP  
Shift on Article Choice: Implications for English Education  
in Japan
- 今内 奈月 …… 日本人英語学習者の非対格動詞の誤り —統語構造と完  
結性の関連から—
- 佐藤 可菜 …… The Nature of Over-generated *BE* in Japanese Learners of  
English
- 鈴木 麻美 …… The Effectiveness of Explicit Instruction on English Adjec-  
tive Ordering
- 鈴木 杏菜 …… 二モーラからなる日本語の外来語短縮
- 高橋 里奈 …… Word Formation via Negative Prefixes
- 永山 果奈 …… Definite Noun Phrases Representing New Information in  
*There*-Constructions
- 馬場 美咲 …… 名詞化における補部の具現化について

★ 増富ゼミ (英語学)

- 齋 瞳子 …… Yes / No 疑問文における be 動詞の考察
- 小笠原茉耶 …… 英語の音変化と英語学習者に向けた教授法
- 加川 咲彩 …… Regional Differences in Pronunciation in British English: The Pronunciation of /r/
- 加藤 瑠菜 …… 英語における小節の構造について
- 川畑亜里沙 …… The Effect of Extensive Reading on Second Language Acquisition
- 熊谷 有紗 …… 関係代名詞の選択 — 文法的・文学的観点から —
- 笹嶋 星奈 …… 第二言語習得に関する研究 — 日本人英語学習者の冠詞のエラーと学習法 —
- 佐藤 源穂 …… The Word Order of Adjectives in English
- 佐藤 未悠 …… 英語と日本語の文構造の違いについて — 英語教育へのアプローチ —
- 庄子 紗奈 …… Japanese and English from the Perspective of Cognitive Linguistics
- 成田 眞由 …… サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語に関する考察
- 林 らら …… English Honorific Expressions: Compared with Japanese Honorific Expressions
- 藤野紗葉里 …… 日本の小学校英語におけるフォニックス —マジック e を教える有用性—
- 柳原 莉子 …… 日本人英語学習者の英語冠詞習得について
- 渡邊 彩花 …… サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語の言語特性に関する考察

★ Wiltshier ゼミ (英語学)

- 白鳥 安夏 …… The features and future of the extensive reading program using Xreading in the English Department at Miyagi Gakuin Women's University
- 東山 令奈 …… Motivation and English language learning: The relationship between motivation and English learning for Miyagi Gakuin Women's University second year students of English literature
- 早坂 藍 …… Increasing English output opportunities in Japanese junior high school classes: The argument for and suggested grade-related techniques
- 高丸 奈々 …… English learning in Japan: A summary of kagaku-teki ni tadashi eigo benkyouhou (the scientifically correct way to study)
- 曾根麻莉菜 …… Effective English language learning using shadowing
- 鈴木 夢菜 …… Using movies to increase student motivation for learning English in junior high school classes

★ 吉村ゼミ (英米文学・文化)

- 遠藤 琴乃 …… シャーロック・ホームズに見るイギリス文化 -『バスカヴィル家の犬』を通して-
- 遠藤 留奈 …… 18世紀イギリスの服飾が示す意味 -ウィリアム・ホガースの作品を通して-
- 木村まひる …… イギリスにおける茶文化 -17世紀から19世紀を中心に-
- 工藤 南 …… 《娼婦一代記》からみる18世紀イギリスとウィリアム・ホガース

- 後藤 菜奈子 ……*Ophelia: John Everett Millais Expression Through the Masterpiece*
- 今野 春奈 ……「階級」とは何か –19 世紀イギリスの社会を通して–
- 佐藤 綾香 …… ホイッスラー美術と日本
- 佐野亜利紗 ……ウィリアム・モリスのデザイン –テキストスタイルを中心に–
- 高橋 七海 ……イギリスの祭り –伝統と変化–
- 玉木 美羽 ……1960 年代のビートルズ –3 枚のアルバムを通して–
- 戸田 麻衣 ……英国の社会階級 –19 世紀から 20 世紀初頭の使用人–
- 松田亜利紗 ……The Changing Brushwork of Turner, and His Goal
- 水沼 歌倫 ……ヴィクトリア女王とイギリス近代の家族像

#### ★ 田島ゼミ (英米文学・文化)

- 堀内 真優 ……F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* におけるデイジーの決断
- 浅野 早耶 ……憧憬の眼差し –Toni Morrison の *The Bluest Eye* におけるピコーラを襲う悲劇の根源–
- 小川 莉央 ……家庭教師の行動理念 –ヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』に見る失敗–
- 加藤 榛菜 ……マイルズの死 –ヘンリー・ジェイムズ『ねじの回転』におけるヴィクトリア朝の女性–
- 今野 朱莉 ……理想の結婚相手 –『歓楽の家』における上流階級の女性–
- 笹川 桃香 ……F. スコット・フィッツジェラルドの『偉大なるギャツビー』に見る偉大な死
- 佐藤まゆ子 ……F. Scott Fitzgerald's Life and Nick Carraway in *The Great Gatsby*

- 佐野 碧 ……『歓楽の家』における 19 世紀の女性像 —リリーはなぜ結婚しない選択をしたのか—
- 高橋 愛佳 …… 夢と現実の超えられない壁 —『グレート・ギャツビー』から見る階級意識—
- 原澤 紀衣 ……ホーソーン作品から見る共依存 —19 世紀アメリカ女性の理想像を巡って—
- 堀 茜 ……ヨーロッパ社会の女性像 —ヘンリー・ジェイムズの「デイズ・ミラー」について—
- 堀 真奈衣 ……著者は世に何を伝えたかったか —オルコットの『若草物語』における 4 姉妹それぞれの個性を通して—
- 安室 海咲 ……ニックが魅了されたものとは —*The Great Gatsby* におけるアメリカン・ドリーム—
- 渡辺 杏梨 ……なぜピコーラに悲劇が起きたのか? —トニ・モリスンの『青い眼が欲しい』における黒人差別について—
- 渡邊 凧紗 ……何故ピコーラは青い眼を求めたのか —トニ・モリスンの『青い眼が欲しい』における黒人差別の負の連鎖について—
- 渡邊帆瑠奏 ……トニ・モリスンの『青い眼がほしい』におけるピコーラを通して分かる白人優位社会と黒人差別

★ 酒井ゼミ (英米文学・文化)

- 駒ヶ嶺柚奈 ……『黄金のノート』がみせる社会構造と自由な女の事実 —これからのフェミニズムと自由とは—
- 佐藤 芙美 ……ワーズワースと自然 —『序曲』における変化について—
- 高橋 芽以 ……『不思議の国のアリス』における現実世界の反映 —アリスの世界と現実の比較—
- 武田沙紀恵 ……『高慢と偏見』が見せる歪み

- 鈴木 綾乃 ……『ジェーン・エア』の生き方 –三組の男女から見えるヴィクトリア朝の結婚観–
- 林崎 蓮 ……生き続けるホームズ –コナン・ドイルの生きた時代と作品から読み取れる魅力とは–
- 文屋夕佑華 ……『動物農場』から読む腐敗情勢 –支配階級の悪徳さと無慈悲さ–
- 松尾 佳奈 ……『高慢と偏見』における理想の結婚 –エリザベスの成長・結婚観の変化を通して–

## 2020 年度 修士論文題目

(指導教員 田島・吉村)

- 三浦万理恵 ……女性への抑圧が生み出す歪んだ視点 –ヘンリー・ジェイムズの幽霊物語に関する研究–

## 英文学会活動報告

### 2020 年

- 7 月 1 日 英文学科 OG による就職講演会①  
「海外就職・ホテル」  
伊藤睦氏
- 7 月 14 日 オンライン「はじめての TOEIC」(1 年生対象)  
佐藤明宏氏
- 10 月 15 日 声と話し方講座 1 年生コース  
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」基礎編  
赤間裕子氏
- 10 月 16 日、23 日、30 日  
声と話し方講座 (2・3・4 年生対象)  
「面接対策・話し方実践コース」  
赤間裕子氏
- 11 月 13 日 声と話し方講座 1 年生コース  
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」展開編  
赤間裕子氏
- 11 月 20 日 英文学科主催  
「月輪まり子 アイリッシュハーブコンサート」  
—アイルランドの文化と詩とともに—  
うた
- 11 月 26 日 英文学科 OG による就職講演会②  
「教育業界」  
浅場理佳氏
- 12 月 19 日 英文学科 OG による就職講演会③  
「航空業界」  
桔梗可菜氏

2月8日 TOEFL 講座  
増井三千代氏



アン・トーマス先生の最終授業 (2021年1月25日)



鈴木美津子先生の最終授業 (2021年1月28日)



ロバート・グリーン先生の最終遠隔授業  
(2021年2月2日)



---

# English Certification

## —私の勉強法—

---



## 「楽しむ」を意識した TOEIC 学習法

2年 渡邊 智咲

TOEIC スコア：670

今回受けた TOEIC はオンラインでしたが、私にとっては2回目の TOEIC でした。去年初めて受けた TOEIC の点数が 350 点ととても低かったため、今年の TOEIC はその点数以上を目指し勉強しました。

まず、前回の TOEIC でどこが特にできなかつたのか、できたのかを振り返りました。私の場合、Reading が特にできなかつたのでそこを重点的に勉強しました。どうして点数が低かつたのかを考えたときに、自分の知っている英単語の数が極端に少ないことが分かつたので、増やすために Word Engine を活用し勉強しました。最初は知らない単語ばかりで難しく、週のノルマを達成するのも大変だったのですが、できるだけ毎日 Word Engine をやるように心がけました。Word Engine では一つの単語を覚える期間を空けて出題され、間違えたら覚えるまで何回も繰り返して学習することができます。また、スマホがあればどこでもできるので、面倒くさがりの私にも続けられました。毎日続けたことで、知っている単語が増え、リスニング問題で速く問題の意味が分かつたり、長文問題や文法問題にも活かすことができました。

また、頭で覚えた単語や文法を ESL や Speaking の授業で積極的に使い、アウトプットすることも心がけました。その際、ネイティブの先生が話した英語の中で自分でも使えそうなイディオム、先生や友人が指摘してくれたことはただ聞きながすのではなく、なるべくノートに書き留めることも意識しました。

Reading で高い点数を取るために、多読にも力を入れました。前回の TOEIC の長文問題で時間が足りなかつたというのが反省点の一つにあっ

たので、多読では時間を意識し、なるべく速く尚且つ正確に状況把握ができるように取り組み、また、どの本でも2回は繰り返し読んでからクイズをするようにしました。知っている単語が増えると、より本の内容が理解できて多読をするのも楽しくなったので、単語を覚えることはやはり大事なのだと思います。

ここまでどのように取り組んできたかを述べてきましたが、特に私が意識したことは「自分が楽しみながら勉強する」ことです。嫌々学習しても頭には入ってこないし、ストレスになるだけなので「今日はちょっと無理かも」と思ったら多読や Word Engine をせず、洋楽を聞くだけの日もありました。その分、次の日には切り替えて勉強をすることが出来たので、楽しみながら続けるのが大事なのだと思います。来年の TOEIC では今回受けたときの点数よりもさらに高い点数を取ることができるよう勉強していきたいと思います。

## 私の TOEIC の勉強方法

3年 佐藤恵里香

TOEIC スコア：695

私は、前期に TOEIC の試験を受けるにあたり、毎日少しずつでも英語に触れることを意識しました。これが TOEIC の点数が伸びた理由だと思います。英文学科では、年に一度は必ず TOEIC を受けます。そこで点数を上げることは、1年間の自分がやってきたことの成果を確認する場でもあると思うので、絶対に去年より良い点数を取るということを目標にしました。

試験が近づいたときにまず行ったのは、文法問題を繰り返し解いたことです。コロナの影響で授業開始が1か月程遅れ、何も勉強しないまま

TOEIC を受けることに不安を感じたため、持っていた参考書を使って勉強しました。しばらく英語を勉強しないと、文法や語彙を忘れてしまうので、反復することで、じっくり考えなくても直観的に判断できるようになると思います。参考書は何年か前から使っていたもので、私に合っていたので、新しいものは買いませんでした。毎年新しいものを買わなくても、自分にあった参考書を見つけることが大切だと思います。

また、リーディングについては、読解問題が載っている参考書を使用しました。いつも時間が足りなくなってしまう、最後の方の問題は適当に答えてしまうことが多いので、早く読めるように対策をしました。一回読んだだけでは内容が理解できず、何度か戻ってしまうことが時間がかかる原因だと思います。However, moreover などのディスコースマーカを意識するようにしました。実際に試験を受けたときには、時間はやはり足りなくなりましたが、以前よりはリーディングの点数が伸びたと思います。

他にはこれといった対策はしませんでした。海外ドラマを見る際には字幕版で見るなどを心がけました。参考書などを使って勉強するのも大切ですが、実際に使われている英語を見聞きし、楽しみながら勉強するのも良いと思いました。また、2年生までに受けた多読やリスニングなどの授業で、英語の基礎が身についたことも点数が伸びた理由の一つだと思います。

TOEIC の点数を上げるために勉強するというよりも、自分に合った学習方法を見つけて毎日英語に触れることが大切だと思います。毎日勉強するのは大変ですが、自分なりの方法を見つけると、学習が楽しいと思います。私の今後の課題はリーディングです。時間配分に気を付けたり、内容を一回で理解できるようにしていきたいです。

## わたしの英語学習法

3年 安田 成美

英検準1級取得

TOEIC スコア：650

1年時に TOEIC を初めて受けた時、スコアは 370 点でした。それから 3 年生にかけておよそ 270 点の点数をあげることができました。私自身英語が大の得意というわけではなく、勉強の結果、TOEIC の点数がついてきた形でした。私は、TOEIC の勉強をすると同時に、英検の勉強をしました。TOEIC と英検の勉強を同時してきたおかげで、英語の基礎力が伸びたと言えます。

それでは、勉強法について紹介します。私の勉強法は (1) 過去問を解く (2) テスト専用の単語帳を読む というスタンダードなものです。大事なことはテストの傾向をつかむということです。私は TOEIC の勉強をすると決めたその日に過去問に取り掛かりました。基礎的な英語の勉強も、もちろん大事なのですが、TOEIC と英検の勉強をして思ったことは、どちらも同じくらいのレベルなのに、テストによって出題傾向が全く違うことです。

例えば TOEIC によく出る単語として launch (売り出す、事業を開始する) という言葉がありますが、これは英検によく出る単語ではありません。TOEIC はビジネス向けのテストなので、ビジネスでよく使われる言葉が良く出ます。このような傾向を知るのには、やはり過去問が一番よいです。私が使った過去問は、『公式 TOEIC 問題集』と『英検過去 6 回全問題集』です。テストを作っている会社から出ている問題集が一番、テストに近い内容だと思ったので、これを使いました。過去問にとりかかる時、私は時間があれば 3 回は同じ問題を解きます。1 回目は何も見ないで解く、2 回

目は間違えた問題を解く、3回目はもう一度、全部を解きます。他の問題集を解いてもよいのですが、一度間違えた問題は、何度も間違える可能性があります。同じ問題集をつかって、間違いを完璧に理解するのが得点に繋がると思います。

次にテスト専用の単語帳を読むというのは、やはりテストによって出る単語は変わってくるので、テストで得点に繋げるには専用の単語帳が効率的です。人それぞれに単語を覚える方法があると思いますが、私は単語を覚える時、分からないところに透明な付箋を貼っていました。見返すときに、どの単語が分からないか一目で分かるからです。

私の勉強法は、得点を取るための一つの手段です。自分にあった勉強法を見つけるためにも、いつもと違う勉強法に挑戦することも、得点に繋げる第一歩だと思います。

## 私の英語学習法

3年 米沢 梨乃

TOEIC スコア：650

私が今回、English Certification A に該当するスコアを越えるために役に立ったと思うのは、去年の秋に受験した学内 TOEFL の時の勉強と、Listening を重点的におこなっていたことだと思う。

今回は初めてオンラインで TOEIC を受験し、また時期が急に決まったので、TOEIC の対策を今までのように十分にとることができなかった。前年度に受けた TOEFL は半年かけて対策をしたので、その勉強したものがとても役に立ったと思う。その時に時間をかけたのは文法などの問題だ。私は特に文法の部分が苦手なので、この部分の過去問を解き、間違ってしまった部分を文法書で確認し、同じような表現の文に触れることで、定着

を図った。そして、次の日や何日か後にもう一度その文章を見返したり、間違った部分の問題を解きなおしたりした。私の場合、問題の質より量を解いたほうが定着すると思うので、とにかく量を解くことを意識していた。

もう一つの Listening に関しては、洋楽を聴いたり、洋画を鑑賞したりしてとにかく英語に触れることを心がけた。洋楽を聴くときは、何度も聴き、メロディーなどを口ずさめるようになったら、歌詞をノートに書きうつす。そして、その和訳を自分の力で書いて、そのあとに様々な人が訳しているものと照らし合わせ、意識も取り入れる。この作業は楽しく、また勉強の堅苦しさがないので、とても楽しく英語の勉強をすることができた。洋画を見るときは、字幕を基本は日本語に設定し、英語の音声で鑑賞する。英語で言っている部分がうまく聞き取れなかったり、英語を聞いて自分が想像した和訳と違う時に、字幕を英語に設定し、英語を目からも耳からも入れた。これも、英語の勉強を強いられているというよりも、映画を鑑賞しているほうに近いので、とても楽しんで英語の勉強ができた。また、テキスト等では触れられない、日常会話等で使える英語を習得することができるだけでなく、ネイティブの英語に慣れることができるので、私が目指す英語習得に近い形でできる勉強だと思う。

私は、英語をこれからも勉強だけではなく使えるものにできるようにしたいと思っているので、それに合った自分の勉強法を今も探している。どれだけ楽しんで英語を習得できるかにフォーカスをあてながらも、自分の英語力を伸ばし続けられるようにこれからも努力していきたいと思う。

## English Certification A・B・C

「English Certification A・B・C」は TOEIC 等のスコアや英語関係の検定試験合格等により単位を認定する制度です。

	TOEIC	英検	TOEFL paper	TOEFL iBT	IELTS
English Certification A	600 以上 720 未満	2A 級	500 以上 550 未満	65 以上 79 未満	5.5 以上 6.5 未満
English Certification B	720 以上 830 未満	準 1 級	550 以上 600 未満	79 以上 96 未満	6.5 以上 7.5 未満
English Certification C	830 以上	1 級	600 以上	96 以上	7.5 以上

## 2020 年度単位認定者数

English Certification A : 16 名

English Certification B : 7 名

English Certification C : 1 名

# 編集後記

『Editor's  
Note 2020』

At the beginning of this year we welcomed two new teachers to the department; Yusuke Sakai, specializing in British literature and Sanae Fujisaki, specialising in English education. Both teachers have fitted in smoothly and have quickly become important members of the English department's team. As well as teaching and researching their chosen areas, Sanae has successfully managed the ESL transition to an online platform and Yusuke has enthusiastically embraced being on the editorial board of this journal.

At the end of this year, three part-time teachers will retire from our department. We would like to sincerely thank; Anne Thomas, Robert Green and Mitsuko Suzuki for the huge amount of time and effort they have put into their teaching here over many years. Our students have been very fortunate to have had such able and dedicated teachers. Please look back over previous years of this journal for their contributions.

Finally, a note to all our students; this year has been a year in which you have had to adapt. You have had to adapt your learning style and study skills to fit into this new normality. This journal contains some specific examples, but we know all of you have been affected. 2020 has not been an ideal nor easy year to be a student, so we would like to thank you all for; taking the many innovations in your stride, your understanding and cooperation with regard to new rules and your patience when things perhaps didn't go so smoothly.

編集委員 John Wiltshier

## 執筆者紹介

John Wiltshier 宮城学院女子大学教授  
清水菜穂 宮城学院女子大学教授  
吉村典子 宮城学院女子大学教授  
Jennifer Green 東北外語観光専門学校教員

## 編集委員

John Wiltshier  
吉村典子  
酒井祐輔  
木川奈緒

## 英文学会誌 第49号

発行	2021年3月10日
編集	代表 John Wiltshier
発行所	宮城学院女子大学 学芸学部英文学会 仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号 電話 (022) 279-1331(代)
印刷所	プリントコープ KOPAS 電話 (022) 727-1760